疾風怒涛の80年代を、社会主義革命の勝利に向け、進撃せよ！

全国の共産主義者、先進的労働者、先進的農民・学生諸君！

八〇年を、単一の全国的なマルクス・レーニン主義党創建の飛躍の年とせよ！全戦線で社会主義革命の要求を組織し、プロ独を準備する闘いの躍進の年とせよ！迫りくる嵐、革命と反革命の一大激突を闘い抜く、新たな戦闘の年とせよ！

共産主義者同盟（革命の旗）中央委員会

年頭アピール

革命の旗

共産主義者同盟（革命の旗）中央機関紙

新年号（第6-7合併号）

1980.1.10

（毎月5日、20日発行）

特価 200円

発行人　北沢晋

発行所　赤流社

TEL(03)407-3511

東京都世田谷区千歳郵便局・私書箱4号

振替口座 東京7-86947

「革命の旗」定期購読

年間送料共2500円（開封）3000円（密封）

全国の同志・読者諸君！　全ての共産主義者と闘う労働者・農民・学生の皆さん！

八十年代の幕あけにあたって、共産主義者同盟（革命の旗）中央委員会の年頭アピールを送ります。

＊　＊　＊

七九年は新たな激動の予兆と胎動をくっきりと印しながらその幕を閉じた。ベトナムのカンボジア侵攻―併合・中越国境衝突とイラン革命によって幕開けた七九年は一方に、カンボジア人民の抗越抗ソ救国闘争の不屈の拡大とラオス・ベトナム内に生まれつつあるソ社帝―ベトナム拡張主義者に対する闘い、他方に、ニカラグア革命、朝鮮南半部人民の人民蜂起の端緒と「朴射殺」の政変―民主革命の新しい嵐と朝鮮自主的平和統一の歴史的潮流の昂まり、イランの反覇権・反米帝闘争の高揚等、巨大なうねりをつくり出した。そして、ソ社帝のアフガニスタン侵攻―軍事占領によって幕開けた八十年は、ソ米覇権争奪戦の激化＝第三次帝国主義戦争の第一段階がいよいよ激しくなり、その中で、革命の要素と反ソ反米反覇権国際人民闘争が、一段と広く深く激しく燃えあがっていく、戦争と革命の大動乱の一層の発展を浮き彫りにしている。

この世界情勢に密接に連動して、わが国でも、「上層」が今までどおりに支配していくことができず、「下層」が今までどおりに生活することを望まなくなる「全国民的危機」が次第に発展し、大規模な政治的流動と激動が始まった。日帝の体制的危機が新たに深まり、第二段階へ進行する中で、日帝の一つ一つの重大な方策から、社会主義は直接に実践的に浮かび上がり、革命の客観的諸条件の成熟がまざまざと示されている。このことがいよいよ真剣に、革命的主体・プロレタリア階級の革命的主体力量をどのように築き上げ、鍛え上げるべきかを問い、これをめぐって、日本階級闘争の歴史的転換がかたちづくられている。

＊　＊　＊

七九年から八十年へ、この攻防は、今やくっきりと浮かび上りつつある。一方では、ブルジョア階級が、体制的危機と自己の支配の動揺の打開をめざす死活を賭けた強行的諸方策に際して、官僚的＝軍事的国家機関の一層の再編・強化と共に、当面する集中環を「連合政権」―右翼的「労戦統一」として押し出している。すなわち、労働貴族・公然たるブルジョア的「労働者」党を、ブルジョア階級独裁の公然の一翼として前面に押し出し、労働運動を「産報」化し、もって人民闘争を労働運動から切断し、プロレタリア階級と被搾取勤労大衆との間に障壁を築かんとしている。

だがしかし、他方では、この十年近く、様々な水路から、歩一歩、模索と曲折の中に前進し続け、新たな力を築き上げてきた労働者と勤労人民の闘いは、漸く、それらが一つに合流しながら、一層広く深く、かつより根本的に〈革命と反革命〉の八十年代に立ち向かう力へと錬成していく真剣な試練へ踏み出し始めた。

この核心に、日本共産主義運動の歴史的転換をめぐる分化・再編の本格化―新旧修正主義と明確に分岐した単一のマルクス・レーニン主義党創建の胎動があり、分かち難く結びついて新たなルツボをつくり出しているのだ。

＊　＊　＊

しかり！　この只中で、わが共産同（革命の旗）は闘いとられた。それは、日本プロレタリア階級を指導して日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命を遂行し抜く、プロレタリア階級の単一の戦闘指令部＝単一のマルクス・レーニン主義党創建の胎動を現実のものとして物質化する第一歩であった。そして〈全戦線で社会主義革命の要求を組織してプロ独を準備する〉長征に進み出し先進的労働者と固く結合しながら、日本階級闘争の歴史的＝質的転換の確固たる推進者として、その一歩を踏み出している。

七九年は、疑いもなく、七十年代をしめくくるにふさわしい偉大な一歩であった。また八十年代への橋頭保を築く新たな一歩であった。

＊　＊　＊

全国の同志・読者諸君！　全ての共産主義者と闘う労働者・農民・学生の皆さん！

八十年を、八十年代の深まりゆく激動の鉄火の中で社会主義革命の主体的準備を整える、力強い第一年としよう！　単一の、全国的なマルクス・レーニン主義党創建の飛躍の年としよう！　〈戦争と革命〉〈国家と革命〉に対する原則的かつ実践的態度を整え、労働戦線を主戦場に日本階級闘争の歴史的＝質的転換に深く分け入り、〈全戦線で社会主義革命の要求を組織し、プロ独を準備する〉闘いをたゆみなく推し進め、鍛え上げ、帝国主義、新旧修正主義との血みどろの闘いを闘い抜こう！　〈資本の収奪―生産手段の社会化と社会主義的生産の組織化をめざし、ブルジョア階級独裁の打倒・プロレタリア階級独裁の樹立！〉へ一切を系統づけ、マルクス・レーニン主義党創建と固く結びつけ組織し抜き、社会主義革命への胎動を巨大な力へと領導しうる唯一の力＝社会主義労働運動をつくり出すために、心血を注ぎ込もう！　プロレタリア階級の自覚した先進闘士を「社会主義革命の要求を組織し、プロ独を準備する」党の隊列へ引き入れると同時に、革命で前衛の勝利を保障することができる新しい立場に大衆を導いていくすべを知る任務を、現下の人民闘争と「連合政権・経営参加・右翼的『労戦統一』」に対する頑強な闘いの中で、統一的におし進めよう！　単一の全国的なマルクス・レーニン主義党創建の闘いを、自力更生と統合の両面において発展・推進し、一つの画期をなすべきマルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成を戦取しよう！

同志諸君！　読者諸君！　《革命の旗》をしっかりと握りしめ、労働者の日々の汎ゆる闘い、人民闘争全体の最先頭で闘いつつ、全ての工場・地域に細胞を建設して全ての工場・地域を社会主義革命の要塞につくりかえていく、堅忍不抜の闘いに着手せよ！　『革命の旗』を、真に全国的政治新聞へ鍛え上げよ！　プロレタリア階級の前衛党となるにふさわしい指導骨幹を深々と築き、鍛え上げるために奮闘せよ！　わが党建設の闘いを、階級闘争の新たな息吹きとしっかりと結合しながら、その歯車を着実に回転させよ！　その時、我々は次のように言うことができるであろう！

嵐よ、もっと強く吹き荒れよ！　さすれば、革命的労働者階級は海燕のように、まっしぐらに敢然と突き進んでいくであろう！　と。

本格的接近を前に 革命の主体的条件を全力で整えよ

わが党は訴える

中央委員会　政治局

読者諸君・同志諸君！　日本階級闘争の歴史的転換に分け入り、八十年を単一の、全国的なマルクス・レーニン主義党創建の飛躍の年とせよ！　高々とわが《革命の旗》を掲げ決意も新たに「革命と反革命」「疾風怒涛」の八十年代に出撃せよ！

読者諸君・同志諸君！　年頭、ソ連社帝は五万以上の軍隊をおしたてて、アフガニスタンに攻めこんだ。これに対しアフガニスタン人民は、反ソ反カルマルを掲げ、断乎たる反撃戦を闘い抜いている。こうして史上三度目の戦争と革命の時代が、いよいよ本格化・成熟している。だからこそ、第三世界諸国・人民の反ソ反米反覇権の不屈の闘いと固く結合し全戦線、とくに労働戦線で社会主義革命の要求を組織し、プロ独を準備する闘いを一層促し、強めると同時に、マルクス・レーニン主義諸分派との統合を実現せねばならない。日本階級闘争の前途は、わが《革命の旗》の双肩にかかっている。先鋒隊・中核としての責務を貫遂せよ！

日本階級闘争の歴史的＝質的転換が始まった！――その環は何か――

現在、日帝の体制的危機が新たに深まり、第二段階に移行する中で日帝の一つ一つの重大な方策から、社会主義は直接に、実践的にうかびあがっている。革命の客観的諸条件は、成熟している。問題は、革命的主体の立ち遅れ、未形成・未成熟をどのように克服するかである。レーニンは「『イスクラ的』戦術の最後の言葉」の中で「変革が社会＝経済的発展の諸条件によって完全に成熟するなら、いつでもプロレタリア階級はこの変革をなしとげるのに十分な力をもっていると考えるのは誤りであろう」「変革は成熟しても、この変革の革命的創造者たちの力はそれをなしとげるのに不充分だということもありうる」と述べている。然りである。

《革命の旗》結成以降、約半年の党建設の闘いをつうじて、われわれは、プロレタリア階級とその同盟者・友勢力を一個の物質力へと編成する能力を一定程度形成・蓄積した。しかし未だ絶対的に不充分であり、飛躍的な発達に向けた真剣な努力・訓練を必要としている。故に、日本階級闘争の歴史的＝質的転換を正しくつかみ、誰よりも深くわけ入り、帝国主義、新・旧修正主義と血みどろの闘いを闘い抜かなければならない。

現在、ブルジョア階級は体制的危機が第二段階へ進行しはじめる中で、戦争と反動への熱望をいよいよ強め、一層自衛隊・警察・官僚機構の強化、労使関係の一層の安定を目指し、その当面する集中環を「連合政権」―右翼的「労戦統一」として押し出し、もって様々な水路から一つに合流しつつある人民闘争を労働運動から切断し、労働運動を「産報」化し、プロレタリア階級と被搾取勤労大衆の間に「万里の長城」を築こうとしている。

日本階級闘争の歴史的＝質的転換とは、まさにこの「連合政権」―右翼的「労戦統一」とどう闘い、戦術左翼的質を越えた「革命的創造者」（レーニン）をいかに大量に形成していくかという転換である。その中心問題、要として、労働運動の管制高地をどのような路線・政治性格として戦取し、労働運動をどのような主導力として形成し被搾取勤労大衆といかなる相互関係を作り出すか、としてある。

読者諸君・同志諸君！　わが《革命の旗》の八十年の基本的方向・課題とは何か。労働戦線を主戦場とし、〈全戦線で社会主義革命の要求を組織し、プロ独を準備する〉闘いを、レーニンが「共産主義内の〝左翼主義〟小児病」の中で示した「プロレタリアートの自覚した前衛をソビエト権力と労働者階級の独裁の味方に引き入れる」「第一の歴史的任務」と「第二の歴史的任務」、すなわち「革命で前衛の勝利を保障することができる新しい立場に大衆を導いていくすべを知る任務」の同時一体的遂行の闘いと固く結びつけ、党建設の自力更生と統合の二側面を発展・推進することである。

読者諸君・同志諸君！　わが《革命の旗》の八十年の具体的な政治的中心任務、政治・組織工作の重心は何であり、どこか。第一に、「経営参加」「連合政権」とは、労働貴族どもによる賃金奴隷制の護持・ブルジョア階級独裁の直接の執行であることを暴露し、批判し、「資本の没収・生産手段の社会化」、ブルジョア国家権力打倒・プロ独樹立を大胆に突き出すこと。第二に、この「連合政権」に対抗した日共の「経済民主主義」「民主連合政権―統一労組懇」路線、中核派の「人民共闘」―人民戦線政府路線、第四インターの「労農政権」路線などの「左」右の改良主義を批判しつつ、「階級的戦闘的労働組合運動の再生」を掲げ、先進的労働者、戦闘的労働組合活動家を資本から防衛する、と同時に、三里塚を頂点とする七十年代人民闘争の全課題、全成果を継承発展する主導者へと鍛え、高め上げること。第三に、彼らを《革命の旗》の隊列へ参加させ、もって社会主義労働運動創建の闘いを推し進め、社会主義統一戦線の準備に着手すること。第四に、かかる闘いの中でブント系マルクス・レーニン主義分派との統合＝マルクス・レーニン主義の第三次ブント結成を戦取することである。

以上が八十年において、単一の全国的なマルクス・レーニン主義党創建の飛躍に向けた、わが《革命の旗》の闘いの内容である。

読者諸君・同志諸君！　《革命の旗》中央委員会の下に、固く団結し、八十年階級闘争へいざ進撃せよ！

革命的情勢の本格的接近――全戦線にわたる反動と人民闘争の昂まり

1

革命的情勢の本格的接近を示す第一の指標は、大平政権成立後の一年に日帝・ブルジョア階級が手にした一時的、一定の〈余裕と安定〉の諸要素が動揺していることである。

第一は、日帝の基本路線に変更はないもののブルジョア階級と自民党の中に、選挙敗北の総括、財政再建・行政改革の諸政策、及び政治体質の刷新をめぐり、新たな亀裂と抗争が生起、激化し、先の大平第二次首班指名選挙に見られるように、自民党は事実上〈分裂〉状態に突入していること。実際、第二次大平内閣は、かろうじて発足したもののその基盤は弱体、不安定であり、八十年七月の参院選までの暫定内閣である。第二は、一般消費税を目玉にした一大増税攻撃が、「一切の所有者階級を全般的に帝国主義者の側に移行させる」動きに、一定歯止めをかけ、押し戻したこと。第三は、ドルショックとオイルショックの中で、七五年度から「実質成長」に回復した日本経済は、七六年から連続四年間五%台の成長率を示したが、イラン革命によるOPECの数度にわたる原油価格の引き上げ、一バレル＝三十ドル台への突入と円安によって、マイナス成長へ転換する可能性がでてきたこと。第四は、南朝鮮の反朴・民主、維新体制打破の革命的戦闘的軍事的発展とそれを緩和し、対抗するための予防反革命軍事クーデターによる南朝鮮での「全国的規模での政治的危機」（レーニン）の進行、及び国内の深刻な財政危機により、パイが小さくなり、国家財政や植民地からの超過利潤の小部分の配分も困難になり始めていること。第五は、民主カンボジアの日帝によるベトナム援助停止要求、革命イランの日帝の米帝追随姿勢に対する非難等を通じ、宥和主義的対応の限界が少しづつ明らかになってきたこと。第六は、〈中道勢力〉を取り込んだ「部分連合」から「連合政権」に踏み出し、「五五年体制」の崩壊が急速に進行したこと。第七は、マルクス・レーニン主義分派、とくにわが《革命の旗》が堅実な党建設を推し進め、急進民主主義諸派が掌握している人民闘争の主導権を少しづつではあれ、奪取しはじめていることである。

2

革命的情勢の本格的接近を示す第二の指標は、日帝・ブルジョア階級が帝国主義戦争の本格的準備に突入していることである。

第一は、日米安保体制の再編・強化―戦争発動体制の本格的準備と日米共同作成の作戦範囲の拡大を推進していること。八月一八日から二週間にわたった朝鮮侵略反革命戦争を仮想した米韓日合同上陸演習＝フォートレス・ゲイル。対ソ戦を見せえつつ「アジア太平洋安保構想」に基づき環太平洋への軍事的侵出に向けた、ニュージーランド、カナダ、オーストラリア米を含めた環太平洋合同演習＝リムパックは、そうした一環である。

第二は、自衛隊の質・量的強化を推し進める、と同時に官僚機構の統・廃合による国家・官僚の権威の再確立を目指す中で、公然たるブルジョア的「労働者」党結成―「連合政権」と、これに相応する右翼的「労戦統一」を急速に推し進めていること。もってプロレタリア階級・人民をブルジョア的民主主義の下に永遠にしばりつけ、戦争へ動員しようというのだ。

第三は、侵略・反革命の一層の強化・拡大である。訪米中、園田は「アメリカはアジアでも世界でも大いに影響力を発揮してもらいたい。しかし、アメリカにとっても、かつてのようにいかない問題がある。アメリカが発言するとこわれる問題もある。そういう問題は日本が発言しよう。ヨーロッパについても同じことがいえるので日本としては大いに関心をもってのぞもう。東欧にも積極的に関与しようし、アフリカ・中南米も積極的にまわろう。そして日本が発言したほうがいい問題は積極的に発言する」と、米帝の軍事力を後盾とし、宥和的な対応をとりつつ米帝に地域的にとってかわり、アフリカ・中南米に侵出し、アジア―ASEANの盟主として君臨し過剰資本の輸出、新たな国際的蓄積構造の形成を通じ、中国を引きつけ、補完させ、環太平洋勢力圏―小「東亜共栄圏」の確立・実現でもって、世界再分割戦の一角を本格的に担わんとしていること。かかる中核・戦略的要に依然として朝鮮南半部が位置し、そこでの帝国主義的権益の防衛に必死にならざるをえないこと。また千島問題を媒介にソ連社帝の南下政策と対立せざるをえず、帝国主義的争闘戦が激化していること。

体制的危機と全人民的反撃

第四は、全般的資本攻勢を一段と強めていること。石川島播磨の場合、「昭和五五年度下期には、赤字を解消する」と称し、四千五百人も首を切り、賃下げをやり、労働者にあらゆる犠牲を強制し、東洋工業の場合も、七五年に三万五千人で年産八五万台の生産量だったのが、七九年には二万一千人で九六万台の生産量になり、労働者の疲労は限界点に達している。こうした首切り、合理化の他、倒産解雇攻撃、常時百万人台の完全失業者と二%の失業率の維持、行財統制―自治体再編攻撃、受益者負担による福祉の低下・公共料金の値上げと一大増税攻撃による大衆収奪の強化、それを通じた国独資の経済軍事的再編と小生産者の暴力的駆逐。

こうして労働者に資本への一層の隷従を強制し、農民の階級分化と離農化、小ブルジョアの急速な没落を決定的に促し、強めている。

第五は、反動攻撃の一層の激化である。四大水路を通じた階級闘争の爆発・発展、社会主義革命に対する反革命のために、プロレタリア階級・人民を戦争と反動の挙国一致体制に動員するために反動攻撃を激化させている。一昨年の三・二六三里塚闘争に心底恐怖したブルジョア階級と自民党政府は「成田特別治安立法」を成立させ、三里塚を戒厳令下に置き、また警察の労働争議への介入＝刑事弾圧日常化による労働者闘争弾圧の強化。有事立法―機密保護法など人民の民主的権利の剥奪、挙国体制への動員化。労基法改悪を通じた戦後的労使関係のブルジョア的再編と女性労働者に対する差別・抑圧・分断の強化。狭山差別裁判上告棄却、「部落地名総鑑」の発行、相次ぐ部落差別事件、「特措法」三年打ち切りと融和団体の育成による部落差別の強化、元号法制化などによる天皇・天皇制の前面化と戦犯合祀、首相の靖国参拝、教育勅語―軍人勅諭の美化を通じた愛国主義・排外主義・国家主義、天皇制イデオロギーの強化。総じて在日朝鮮人、国内被抑圧諸民族に対する、また部落大衆、女性、「障害者」に対する差別・分断・抑圧と差別イデオロギーの強化。司法の反動化と監獄法改悪攻撃、革命的翼への弾圧の強化。

第六は、以上から、いよいよ腐朽性と寄生性が強まり、いよいよ露わになり、プロレタリア階級と第三世界諸国・人民の犠牲の上で命脈を保つという性格を、全人民の前にあからさまにせざるをえないことである。

3

革命的情勢の本格的接近を示す第三の指標は、社会主義革命の客観的―物質的基礎の成熟とプロレタリア階級・人民の反抗の昂まりである。かかる日帝の帝国主義戦争の本格的準備の一つ一つの方策が、生産の社会化と新たな国際的蓄積構造の形成による資本主義的私的所有との矛盾をいよいよ尖鋭化し、物質の生産と分配の社会的規制の機構を準備し、もって社会主義のための物質的条件をいよいよ成熟させ、「死滅しつつある資本主義」「プロレタリア階級の社会革命の直接の前夜」的様相をいよいよ示している。まさに「前進的な発展―もしありうべき一時的な後退を考慮に入れないならーは、社会主義社会・社会主義革命をめざしてのみ、実現可能である」（レーニン）

国家独占資本主義がこのように資本主義のあらゆる矛盾を一層激化させていることから、プロレタリア階級・人民の反抗は不可避であり、実際、高揚しているのである。高揚を示す第一の指標は、資本主義社会の生産諸関係の体系内で要の位置を占め、それ故、新たな社会の担い手、主導力であるプロレタリア階級の闘いの圧倒的前進である。七〇年中期以降、現在へ至る過程で、プロレタリア階級は資本攻勢に対峙し、改良主義指導部の支配・統制を食い破り、破産・分解を突きながら人民闘争を闘い、人民の主導勢力としての地位・役割を少しづつ形成・蓄積してきた。下層未組織労働者の反倒産・反失業闘争と組合結成―組織化の前進、臨時工・パート・家内労働者・失業者の決起と組織化の前進。個別企業・個別産業の枠を越えた地域共闘と全国共闘への発展、倒産解雇に抗し、生活と闘争を結合し前進する自主管理―自主生産の闘い。全逓反マル生闘争のような職場闘争の波状的高まり。三里塚、狭山、日・朝・カン国際人民連帯等の人民闘争への出撃とその主導力としての登場。

こうした闘いの不屈の前進に勇気づけられ、鼓舞され、上層労働者の中に、一定の動揺・流動化がおき始めている。更には、基幹産業での資本と同盟・JC・総連合の支配に対する不満・闘争が爆発・発展し、浦賀の第一組合復帰運動、波止浜・鶴見での新組合結成が戦取されている。三里塚を頂点とする人民闘争に決起する労働者が増大している。かくて、プロレタリア階級は、資本と労働貴族どもに対する反抗を強め、労働戦線の右翼的「統一」を打ち砕く能力を形成・蓄積しつつある。指標の第二は農民・漁民・学生の闘いの高揚である。戦後の農基法以降、現在に至る米作転換・農業構造改善・規模拡大の美名の下に推進されている減反政策に至るブルジョア農政が、実は農業破壊・農村荒廃の歴史であることを、農業諸資材の著しい高騰と飼肥料価格の暴騰によって急速に農業経営を困難に陥し込める中で、農民の大部分にはっきり認識されはじめ、三里塚農民を頂点に全国至る所でブルジョア農政反対闘争が爆発・発展している。更に、反基地・反公害・反原発闘争においても「自然と生活の防衛」を掲げ、多くの農民・漁民・住民の闘いが大きく高揚している。学生は、一昨年の四・二〇文部省通達に抗し、人民闘争と学内既得権擁護闘争を、帝国主義による教育支配の暴露を通じる中で結合させ、新たな昂揚を戦取し始めている。指標の第三は、差別・分断・抑圧に抗する闘争の前進である。部落大衆は解放同盟の下、一・二八に狭山差別裁判再審実現に向けて全国的な大闘争を予定しており、また相次ぐ部落差別事件、「特措法」三年打ち切り策動、融和団体の育成に対抗して、地域に根ざした同盟支部組織の強化、反差別共同闘争の形成・強化等、断固たる反撃を展開している。労基法改悪阻止を当面の軸としつつ、家内奴隷と賃金奴隷の「二重のくびき」からの解放を求め、女性労働者を先頭に前進する女性解放闘争や、養護学校義務制反対闘争を推し進め、生活・教育・医療・労働等、日共の敵対に抗して「自立・解放」を掲げ前進する「障害者」解放闘争。沖縄人民の反CTS・基地撤去・演習阻止を当面の軸にした反米反日沖縄解放闘争の前進や、アイヌ解放を求め、不屈に闘うアイヌ民族。そして、在日朝鮮人の差別・同化攻撃に抗し、民族的民主主義的権利のための闘いの前進。指標の第四は、わが《革命の旗》を先鋒隊・中核とする日本共産主義運動の革命的再編が進行し、三五〇〇万の労働者を一つのプロレタリア階級の軍隊に団結させるマルクス・レーニン主義党創建の闘いが前進していることである。

以上から、プロレタリア階級を指導階級―主体とし、その下に固く結合した人民の闘いの革命的戦闘的軍事的発展と、日帝に対する

革命的情勢の

「連合政権」—右翼的「労戦統一」と闘い
労働運動に社会主義の指導権を打ち立てよ！

第三世界諸国・人民の独立・自主・民族解放を求める闘い、即ち反ソ反米反覇権闘争が結合・合流することは不可避であり、体制的危機の深まりを強制せざるをえない。

読者諸君・同志諸君！ 情勢は体制的危機の第二段階、革命的高揚の第二段階へ突入しはじめた。闘いの赤い糸を撚り合わせ、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命へ織り上げよ！ それには〈全戦線で社会主義革命の要求を組織し、プロ独を準備する〉闘いを一層推し進め、四大水路を通じて爆発・発展する政治・経済闘争の交流・全国化を図り、自衛武装を徹底的に打ち固め、強化し、防壁を築き上げる中で、党の独自のスローガン＝社会主義的要求を掲げ、プロ独の思想の下へプロレタリア階級・人民、とくにプロレタリア階級を組織していかなければならない。プロレタリア階級・人民を社会主義的要求の下に組織しない限り、革命戦争—武装蜂起を実現しえないし、その勝利もない。別の言葉でいえば、単一の、全国的なマルクス・レーニン主義党と社会主義統一戦線があれば、革命戦争—武装蜂起は可能であり、勝利するのである。

現在、日本階級闘争は、七十年代の闘いで形成されてきた諸闘争・諸勢力が一つにまとまりつつあり、新たな高揚を示す中で、「連合政権」—右翼的「労戦統一」をめぐり、労働戦線の管制高地をブルジョア階級とその手代＝労働貴族どもが完全に掌握し切れるか、それともプロ独・社会主義革命を目指す社会主義的プロレタリアが掌握するのか、の一大決戦に突入しており、三里塚を先頭とする人民闘争の爆発・発展・前途も、この闘いの成長・成否にかかっている。そうだ！ 戦略的戦術的にも労働戦線に注目し、工作の重心を置き《革命の旗》の総力・心血を、ここに注ぎ込むのだ。

右翼的「労戦統一」の階級的本質とは何か

急進行する、右翼的「労戦統一」の経過、その目的・階級的性格は何か。七十年前後に「共産党との絶縁、社・民両党再統一」を掲げた宝樹提案を水先案内人とし、右翼的「労戦統一」は大きなうねりを作り出したが、七十年安保大会戦と、それに連動した国鉄反マル生闘争の爆発・発展の前に破産した。今回の右翼的「労戦統一」は、日帝の体制的危機の始まりと同時に具体化し、七六年政策労組推進会議結成、七七年の賃闘対策民間労組会議結成と積み上げ、七八年一月の同盟大会における右翼的「労戦統一」の再提起と、これを受けたゼンセン同盟と鉄鋼労連の「統一」に向けた唱和をもって本格化し、七八年には、中立労連・新産別によって労働組合総連合が結成されこれに電通共闘が加入することで爆発的に進行したのである。この右翼的「労戦統一」の目的・階級的性格は、経過からわかる如く、増強するプロレタリア階級の戦闘力を奪い、「安定した労使関係」（桜田）を作り出し、ブルジョア階級独裁の下に、プロレタリア階級—特に組織労働者をしばりあげ、戦争と反動の挙国一致体制の社会的支柱として全面的に動員することであり、ブルジョア的帝国主義的性格のものである。これは、同盟が右翼的「労戦統一」を再提起するにあたり、①労働組合主義、②民間産業労組先行の統一、③国際自由労連加盟、④左右の全体主義反対、⑤社会主義インターの路線を基調とすることを主張したこと、また総評・同盟・総連合の各々の加盟組合の書記長クラスで作られている「労問研」が同様の内容を確認していることからはっきり見てとれる。実際、同盟・JCの「合理化協力・経営参加・社会契約」と総評の「制度要求・経営参加」の間に、本質的差異は無い。

改良主義・急進民主主義を根本的に批判せよ！

「連合政権」—右翼的「労戦統一」と闘うにあたり、見ておかなければならないことの第二は、右翼的「労戦統一」の政治的反映として、社会党の「社・公中軸」、また公明党を仲介にした「社・公・民」路線—公然たるブルジョア的「労働者」党結成と「連合政権」があることである。

「社・公中軸」「社・公・民」路線とは、労働貴族ども—社会帝国主義によるブルジョア階級独裁の赤裸々な、直接の執行を目指したブルジョア的「労働者」党結成—「連合政権」の道である。

かかる事態の中で、社会党内最左派を自称してきた向坂協会は展望を失ない、加速度的な解体過程へ突入している。と同時に、次の二点に注意せねばならない。

第一は、日共の動向である。日共は、孤立化し、「社・公中軸」路線は「反共革新分断路線であり、反共選別の労働戦線再編成」であると見、「ナショナル・センターとは何かについて、あらためて問う必要がある」とし、「ナショナル・センターの三原則」を提起し、その土台作りを果たすものとして、「統一労組懇」の活動を位置づけている。日共一四回十中委路線を分裂主義と批判するのは一面的であり、本質をついていない。問題は日共が総評を割っていくか、否かにはない。日共が「経済民主主義」「民主連合政権」路線を推進する限り、実際は資本主義の枠内での改良主義以外の何物でもない。かかる改良主義は七十年代階級闘争のルツボの中で、破産を宣告されたものなのである。

第二は、急進民主主義諸派の動向である。彼らは、「連合政権」—右翼的「労戦統一」といかに闘わんとしているのか。中核派・第四インター、解放派は、自民党政府打倒の立場から、三里塚を頂点とする、民主主義的政治闘争の動員と戦闘化をめざし、その衝撃力で「社・公中軸」右翼的「労戦統一」反対闘争を推し進め、労働組合の指導権を奪取し、プロレタリア多数を獲得せんとしている。しかし、中核派・第四インター・解放派は（イ）プロレタリア階級の社会革命を、事実上民主主義に押しとどめていること。資本の没収・生産手段の社会化を提起していない（ロ）ブルジョア国家権力の打倒を、政府打倒に切りちがえ、どのような国家権力を樹立するかを示していないこと。軍隊・警察・官僚機構の粉砕、全人民の武装・武装した労働者の国家の樹立を提起していない。（八）従って中核派の「人民共闘」路線、つまり人民戦線政府樹立、第四インターの「労働者政府樹立」というスローガンは、社会主義革命の要求に基づく、プロレタリア階級独裁の樹立ではなく資本主義（帝国主義）とブルジョア国家に対する戦闘的民主主義的改良のための政府の樹立でしかないこと（二）客観的には、「連合政権—右翼的「労戦統一」によるブル独の擁護に対し、戦術左翼主義的に反対しているに過ぎず、日共に明確な一線を引き切れないこと。

社会主義と労働運動の結合に向けたわが同盟の当面の政策と任務

読者諸君・同志諸君！ 現下の日本労働運動は、一方では帝国主義的再編が急速に進行し、他方では日共が改良主義労働運動のボロ旗をクズ籠から拾い出し、掲げ、それに中核派、第四インター、解放派が客観的に追随している。

だからこそ〈全戦線で社会主義革命の要求を組織し、プロ独を準備する〉闘いを一層推し進め、〈「経営参加」「連合政権」・ブル独の擁護か、資本の没収・生産手段の社会化・プロ独の樹立か〉を生き生きと貫き、戦闘的労働組合活動家、戦闘的労働者との全面的全国的交流を形成し、わが革命的隊列へと組織していくために、われわれは全力をあげて闘わねばならない。

五つの政策を実行せよ！

政策の第一は、日共・革マルをはじめ、民社—同盟、社会党—総評、中立労連等の三里塚闘争への敵対に抗し、連月連日の三里塚闘争を通じ、二期工事着工実力阻止・空港廃港の闘い、決戦中の決戦に労働者多数を動員すること、それを決定的な基軸としながら社会党—総評の狭山、日・朝・カン国際人民連帯闘争への取り組みの限界、すなわち日帝との対決の回避を打ち破る闘いの方向をさし示すことである。

その政策の第二は、反合・賃上げをはじめとした資本との日常的戦闘を断固として組織し、貫徹し職場・地域を不断に戦場へ転化し闘争のヘゲモニーを職場・地域の労働者の手に奪還することである。党とプロレタリア階級を結合するためには、「なによりも労働組合との緊密な結びつき」（コミンテルン「戦術テーゼ」）が必要であり、これを職場・地域の諸闘争の防衛・発展、戦闘的ストライキの実現・爆発と発展に全力を注ぐ中で果たし、戦闘的労働組合活動家・戦闘的労働者との交流を拡め、深め、彼らを社会主義プロレタリアへ鍛え、高め、わが《革命の旗》の隊列に組織すること。

政策の第三は、労働戦線における拠点化建設を通じた《革命の旗》の全国化、地方委員会建設に向けて奮闘することである。労働戦線における拠点化を全方向から一挙に着手することは不可能である。まず、われわれは労働者「下層」に立脚し、党勢を集中し、ここを基礎に階級的原則的労働組合運動を防衛・発展させ、党建設を推し進め、出撃拠点とすべきである。

われわれが労働組合とのより緊密な結びつきの形成に着手しはじめる中で、学生組織委員会は《革命の旗》派の人民闘争に対する政治的動員を支えると同時に、拠点化政策を大いに推し進め学生戦線を、真に人民闘争の先鋒隊・突撃隊へと鍛え、高め上げることを要請されている。それには、三里塚全国学生実行委をテコに 学生戦線の全国的ヘゲモニーの獲得にむけて党の全国化に歩調を合わせ、しかも独自に進撃し、戦闘的学生を鍛え、高め、《革命の旗》に組織していかねばならない。

以上のことから我々は、社会党・総評ブロックの分解に注目し、「右翼的『労戦統一』反対、階級的戦闘的労働組合運動の再生」の闘いを、断固として促し、強め、日共・中核派・第四インター・解放派等の動向を見すえつつ、広大な共同戦線を形成する中で、〈「経営参加」「連合政権」ブル独の擁護か、資本の没収・生産手段の社会化、プロ独の樹立か〉のスローガンを掲げ、次の三点をプロレタリア階級にはっきりと突き出さなければならない。(1)「経営参加」の美名の下に、ブルジョア階級に経済的に隷従している状態に目をつぶり、賃金奴隷制の下にしばりつけられ、ブルジョア階級のために働きつづけるのか、それとも資本を没収し生産手段と流通手段を社会的所有にとってかえ、社会的生産過程の計画的組織化を実現するのか、(2)「連合政権」を通じた賃金奴隷制・資本主義的私的所有の護持・防衛のためのブルジョア階級独裁の擁護か、それとも資本の没収・生産手段の社会化を実現するプロ独の樹立か、(3)ブル独を支え、直接に執行するところのブルジョア的な「労働者」党に結集するのか、それともプロ独・社会主義革命を遂行するマルクス・レーニン主義党—《革命の旗》に結集するのか、と。

しかし、真の意義は、綱領及び党の決定事項・方針を主体的に対象化し、遂行し、貫徹する能力を党と党員一人一人に形成させることにある。こうした観点から、一方では、党中央に（したがって一般に全党に）運動の事情を熟知させ他方では、党員一人一人、活動参加者のひとりひとり、党に所属している、あるいは党に同調しているサークルのひとつひとつの党に対する責任をできるだけ分散させねばならない。そのためには、報告書が定期的、かつ適時に提出されねばならない。

第二の側面は、地方委活動の強化である。地方委活動を目的的に形成・確立・強化すべきである。地方委全体で討議すべき事柄と専門化すべき事柄を分離すべきである。地方委は中央活動の専門化に対応して少なくとも、労働組合対策担当、統一戦線対策担当、理論対策担当を組織する必要がある。それは中央の専門活動に直接協力する、と同時に、地方レベルでそれを貫き、担いきっていくのである。こうした地方委自体の指導の集中と責任の分散—専門化なしに中央委—地方委—細胞の有機的連関と各々の独自活動の形成は、困難である。

第三の側面は、指導観点・方法の確立である。第一、第二の側面に連関し「才能ある組織者」（レーニン）へ党員一人一人を高め、拡大再生産し、大量に形成するための指導観点・方法を確立せねばならない。その第一は、党員一人一人の思想・政治傾向、活動能力を掌握することと同時に、自己点検・総括を規則正しく行なうように指導すること。つまり、党員の、共産主義者の成長度合は一様ではないことを指導部メンバーは決して忘れてはならないのである。第二は、「革命の旗」、『長征』、号外をたえず組織活動の中心に置き、意見をひき出し、常に「革命の旗」等にそって定期的に点検・総括すること。第三は、指導部メンバー自身の不断の鍛練、共産主義者としての形成である。指導部メンバーは、常に指導内容の具体化・豊富化に気を配り、不断の理論的＝思想的研さんに努めねばならない。

読者諸君・同志諸君！ 日本階級闘争の歴史的転換にわけいり、八十年を単一の、全国的なマルクス・レーニン主義党創建の飛躍の年とせよ！ 《革命の旗》を日本階級闘争の最前線に打ち立てよ！

政策の第四は、『長征』で明らかにした「我々の統合の六条件」を基準として、ブンド系マルクス・レーニン主義分派との統合＝マルクス・レーニン主義の第三次ブント結成を戦取することである。個別闘争課題をめぐる直接には大衆組織との、間接には党派間の共闘を結び、人民闘争の戦闘的軍事的発展を実現すること。

政策の第五は、「革命の旗」月二回刊への移行である。これによって「革命の旗」を軸とした宣伝・煽動・組織化は、工業化され、生き生きとした全面的な政治暴露が可能になり、党活動の転換は一層推し進められ、党に一層の規則性を与えることになる。月二回への移行に際し、「新聞に対する材料の規則正しい供給と、新聞の正しい配布とを確保する技術的任務」の遂行に習熟する必要がある。

党の指導骨幹を強化せよ！

以上の五つの政策を実行するにあたり、党の指導系列及び指導部建設を三方面から強化せねばならない。第一の側面は、指導の集中と責任の分散の工業化と報告書の定期的な提出である。〈全戦線で社会主義革命の要求を組織し、プロ独を準備する〉闘いを二つの、「歴史的任務」（レーニン）の同時一体的遂行と結びつけ、物質化していくためには指導の集中と責任の分散の工業化が、必要である。現在、これは直接的には、中央指導の確立・テーゼの作成を意味する。

単一党建設の共同事業の勝利を！

共産主義者同盟（紅旗）

新年のあいさつを送ります。いよいよ八〇年代階級闘争の幕あけとなりました。

流動し、激化する戦争と革命の八十年代に、日本革命を勝利にみちびきえる単一の革命党を闘いとるため、共に力を合わせ、奮闘しましょう。

わが党は、昨七九年における共産主義者同盟（革命の旗）の結成をはじめ、統合をめざす真剣な試みと少なからぬ成果、その努力と前進の全てに、敬意を表し、連帯のあいさつを送ってきました。

わが党も、原則において確固とした紅旗の旗と党風を掲げて、誠実な共産主義者との積極的関係を育て上げ、正しい政治路線の下での団結を願って、大いに奮闘してきました。

今や、南朝鮮で、アジアで、中東で、全世界で、日本の労働者階級人民が、社会主義国と被抑圧民族としっかり結びつき、わが国における革命闘争を前進させ、勝利にみちびき、革命で戦争をうち破るべく断固闘うことが要請されています。

革命と戦争の激動の時代が歩、一歩と近づいているこの時代、日本国内でも、労働者階級・人民の革命行動の深部からの爆発は、小さなきっかけからひきおこされ、小さな火花から不意にもえ広がり全社会を震撼させる状態にあります。

こうした時代をむかえ、八十年の新年にあたって、強調しなければならないのは、たった一つのことです。

日共現代修正主義に代る単一の革命党建設の礎石を、八十年代の早い時期に打ち固めるため、二倍も三倍もの力を出し、闘うことです。

国際プロレタリアートの一部隊である日本におけるプロレタリアートは、世界革命の不可欠の一環としての日本革命に責任を負っています。したがって、自己の政治的主体性を確立し、マルクス・レーニン主義の科学的理論にもとづいて日本革命の政治路線を正しくみちびき出すことが、とりわけ重要であります。

われわれは、かかる基本態度で綱領に、マルクス・レーニン主義の原則を打ち固め、ブルジョア独裁権力打倒・米帝一掃・プロ独樹立の路線を定式化してきました。

われわれは、この路線こそ、日共現代修正主義を頂点とする反米愛国路線または、反ソ愛国路線、新左翼にまんえんする帝国主義的経済主義路線に断固一線を画しえるものと確信しています。

同時に、この原則と路線を、口先きだけのものとするのでなく、実践に貫くことが不可欠です。すなわち、原則と路線を、労働運動と固く結びつけることが必要です。

わが党は、労働者大衆に信頼されここに地盤をうち固め、工場、職場を革命の砦とすることが、単一の革命党を建設するうえで、とりわけ重要であると考えてきました。

この様な理論と実践の統一こそ党建設の要であり、共産主義者の団結と統合を促進し、単一党建設を前進させる上で欠かすことのできぬものにほかなりません。

わが党は、真紅の旗をより高くかかげ、七十年代の蓄積のうえに今日までにまして、謙虚に、かつ大胆に、原則においてゆずらず、副軸において柔軟な姿勢を堅持し単一党建設の共同事業の一翼を担うため、敢然と決意に燃えています。共に、がんばりましょう。

新年にあたり、赤く熱い挨拶を送ります。

同志・高原浩之（東拘在監）

七〇年代は、歴史が人民を揺り動かし、決起を促した時代であり、我々にとっては、突撃と破産、苦悩と動揺、次断と転換、そして再出発の苦闘の時代でした。今、我々は大いに意気込み、大きな目標を目指し、万里の長征を開始しています。八〇年代は、人民が決起し、歴史を創造するために勝利を準備する時代です。今年は下獄します。ここで十年間を過しました。元気で非転向で闘い抜きます。

革命の旗が、この八〇年代を人民のために、共に奮闘されんことを期待します。（文責・編集部）

労働組合運動の戦闘的再生と階級的統一をめざし、八〇年代労働運動の圧倒的前進を！

七〇年代全期を通して徐々に明らかになった日本階級闘争の歴史的転換は、右翼的「労戦統一」―「連合政権」問題を象徴的事例としつつ、〈帝国主義と社会主義の分裂〉の本格的開始として八〇年代の前途をさし示している。かかる時代にあって、先進的労働者の任務は何か、労働（組合）運動の戦闘的階級的前進に向けて、何をなすべきか。

出席者

A……全造船石川島分会
B……〇〇労組書記
C……全国金属本山支部
D……××地域合同労組
E……全逓労組△△地本
（司会・中央労対部）

――今日の労働運動を考えるときに、まず第一に、非常に大きな問題として右翼的「労戦統一」の進行があげられると思います。この右翼的「労戦統一」を現在の日本の労働運動のレベルにとどまらず、広く階級闘争の中にとらえ返し、我々はどのような観点・方法・布陣をもって反撃していくのか、という問題が闘う労働者にとっての焦眉の課題となっているのではないでしょうか。ただこのことを論議するにあたって、我々としては今日の労働運動が結果したところの歴史的背景も含め、この間の労働運動に関して、若干の概括的提起を行って討論の素材を提供しておきたいと思います。

戦闘的先進的労働者の闘いの登場と発展

まず六〇年代後半の反戦青年委運動の昂揚―ベトナム反戦闘争等、青年労働者のエネルギーが既成の労働運動の枠組みを突き破る形で盛りあがってきたわけですが、それが権力による重包囲、職場における資本、組合なりの統制（反戦パージ等）の中で分解し、停滞を余儀なくされる。こうしたなかで、反戦青年委をどう総括するのか、ということが当時論議され、それ自体二元主義的に対立させるべきものではないにもかかわらず、いわゆる「職場か街頭か」という不毛な論争をも生み出していったわけです。一方、労働組合運動のレベルでは、春闘方式が定着し、まさに定着すると同時に空洞化が開始され、高度経済成長下での民同労働運動が開始されそれに対して、独占資本の側からの一大合理化攻撃（「賃上げと合理化のバーター」）と、それにタイアップした形でのIMFJC（一九六四年結成・現在の金属労協）を主力部隊に、とりわけ造船産別における組合分裂攻撃が始まり、鉄鋼労連をはじめ民間基幹産業における右傾化がとめどもなく進行し、争議中ではない、いわば平時における右からの分裂が巻き起ってくる中で、三菱における長船第三組合をはじめとして、分裂左翼少数派組合が登場してくる。この分裂左翼少数派組合の評価をめぐっても、様々な論議があったわけですが、それ以降、そういった実践的経験を基礎にして、反戦青年委の行きづまりから、労活運動が全国的に拡大していった時期が、その次の段階だといえると思います。

七〇年初頭から七四～五年の労活運動とは何かといえば、分裂少数派組合の闘いをそれなりに積極的に位置付け、その全国結集をはかる、という点に主要な問題意識があり、それらの左翼分裂少数派労組にとっての課題が「帝国主義労働運動との対決」でした。しかるに今日、労活自体、その影響力を一定せばめざるを得ない状況を迎えるとともに、対抗的ではないが「労働情報」という全国の労働運動情報誌を軸に、先進的労働者がそれを購読する等の形で、つながりを形成・持続・拡大しようとしている。こうした戦闘的、先進的労働者の闘いの流れの中で、今日の現状はあるのではないかと思います。

六七年宝樹提案から始まった右翼的「労戦統一」の流れも、この流れの中で見ると分りやすいと思うんですが、右からの「総評切り崩し」も、総評労働運動の側からいえば、七三年の政治春闘から七四年国民春闘路線への衣替えを通して、徐々に右への屈服、JCの軍門に下っていく過程だったのではないか。国民春闘路線そのものは、当時、「弱者救済」等、華々しく打ち上げられたわけですが、その内実たるや「春闘＋選挙」というワンセットの中で、制度・政策要求へと闘いを流し込み、四団体共闘に足をすくわれつつ、争議団先進的労働者の闘い等の切り捨てが同時に進行して行ったといえるでしょう。

改良主義の破産と「労戦統一」の進行

こうした中で、去年の総評第五九回大会では、富塚がはっきりと「労戦統一」に向け、「この道以外にない」と大見栄を切って踏み出していくという状況がつくられているんではないか。JCへの屈服あるいは総評のJC化と、引き続く右翼的「労戦統一」への合流、さかのぼれば国民春闘へ衣替えせざるを得ず、しかもその事自身が労働者階級の要求を正しく組織し、引き上げていく事になっていないという背景には、石油ショック以降の日本資本主義の構造的危機があり、春闘方式に象徴される総評労働運動が、高度経済成長の終焉の中で破産し、国民春闘への衣替えも何ら打開の道を示せず、改良主義指導部が情勢に真に応え切れず、彼ら自身の破産をも暴露したということであり彼ら改良主義指導部はJCの軍門に下ることを通して、帝国主義労働運動との統一に自らの延命の道を求めたといえるでしょう。それ故、そのことは同時に総評内左派、左翼反対派として形成されてきた様々な先進的、戦闘的労働者の闘いも、すでに従来の位相に安住していることが許されなくなっているのではないかと思えます。

この後の問題は、皆さんの討論の中で、提起し深めていきたいと思います。

――JC型労働運動への統一でしかないといわれ、現在進行している「労戦統一」とは労働運動の右翼的再編、いいかえるならば右からの分裂攻撃であるともいえると思いますが、JC・造船重機の分裂攻撃を闘い抜いた造船における状況などを、まず糸口に話を始めていきたいと思いますが、Aさんのところなどではどうですか。

右翼的「労戦統一」に対する労働者の自信

A　現在の造船産別のレベルで考えれば、まず「労戦統一」など考えられないね。（全造船の）どの分会でも、複数組合関係で全造船が少数で、相当な切り崩しを（造船重機から）受けてきたし、中小にしたって倒産攻撃の中で必死に闘ってるのが現状だよ。その中で生きのびた、せいぜい五～六十人ぐらいの分会なんかものすごい自信があるよね。オレ達がやり切ってきたって。そういうところも含めて、全然、「労戦統一」なんか問題になんないですよ。

――この間の同盟の動きなんかはどうですか。

A　造船重機の方は最近「労戦統一」について、なにもいっていないんじゃない。前はいってたんだけど、この間の造船合理化の中で、大衆的基盤かなり失って、何いったって信用しないっていうのが（職場の労働者の中には）あるよ。

B　この間の合理化攻撃の中で、造船重機の方は組合員減ってるんじゃないの、石川島だって減ってるし。

A　全造船の方は、この一年で分会数は増えてんだよね。小さなところで、職場を守るために全造船へ入ったっていうのが、合理化やられたこの一年で八つぐらいあるよ。

B　大体「労戦統一」が出てきた背景には、構造的不況の中で、総評も、同盟も、幹部が全然対応できない。高度成長の時はバーターでもなんでもある程度、何がしかのものは取れたけれどもそれもダメ、じゃあ具体的に職場闘争を強化するなり、そう方針が出せるかといったらもうすでに、そういったものは遠い過去になってて、そうなると勢い今ある数を足してきゃなんとかなるんじゃないか、という、わりと単純な発想があると思うんですよ。例えば、全通の水増しで全郵政との合併でしょ。そういう位置から見れば争議やってる所なんか、資本にとっても、「労戦統一」の動向にとっても消したいし、切りたいと思うわけだ。例えば、総評最左派を自認してきた全金が、Cさんのところを切ってきたというのは、早い話、バスに乗り遅れないためでしょ。

C　現在の全金による統制―除名処分を含めて、僕らは二度の分裂攻撃を経験しているわけです。今回の統制処分をめぐった実質的な分裂攻撃については、資本との闘いを継続するのか、どうするのかという問題になってるわけ。全国金属はずっとそれなりに戦闘性を保ってきて、特に七〇年までは分裂の歴史がついてまわって、とことん分裂労組＝全金同盟を否定し、彼らは闘わない、会社にベッタリであると批判し、我々は違うんだということでストライキも打ち、あわせて組織防衛をしてきたというパターンだと思うんです。それはそれでかなりの成果をあげてきたわけだけど、逆に企業内に封じ込めるという構造でもあったわけ。全金の場合、組合的には個人加盟方式でも、実質は大手から中小まで企業別組合の連合になっている。

七〇～二年の一時期、全金の方針としては争議組合をつつんで、地域の団結を高めるというのが一般的だったんだが、七二年を境に全国的に組合ペースで争議が解決されてくる。それと併行して、全金の中で業種別の協議会をつくるという方針がでてきたんです。本山の場合はバルブ労協ですが、これに同盟系も純中立も入れるという方式をとってやってたんだけど、これが不況になってきて、その運営がだめになると同時に逆にJC・同盟の方針の方が、より現実性を帯びたものとして受けとられるようになってきちゃって。全金の場合、合理化絶対反対という立場を貫ぬいてきたわけだけど、いざ企業の提案があった場合、現実的、具体的にどうするのか、といえば、どうも明解な結論が出ない。これは宮城地本の場合ですが、希望退職を含めて会社から合理化提案がなされて、地本に相談にいったら、「そんな事は自分で考えろ」（笑い）といわれて、全金として結成した委員長自らが同盟加入を提案し、丸ごと全金を脱退するということがあったんですよ。

民同―既成指導部の無力と同盟JCへの屈服

――全金指導部の指導性が低下し闘えない、あるいは闘わない状況が生まれてくる。

C　こういう例があるんですよ。五人かな、執行部が解雇になった争議組合が解決したんですけど、この争議で組合は「解雇撤回がない限り、解決はない」と主張を明らかにしていた。ところが、中央本部の人間が乗り込んで何をいったかといえば「この状態のままで闘争を継続して首を切られてないみなさんが首を切られたら、一体誰が守ってくれるんだ」（笑、「いつもそういう手口だよね」の声）ということで、解決させちゃった。そういう意味では、全面的に全国金属がかかえている争議状態を終結させるという方向に進んではきてるな思う。

――全金の場合、最初の大手の光洋精工の脱退・分裂なんかを契機に、いわば大手系のJC派が勢いづいて、一気に右傾化が進んだとか……

C　あの当時は、今よりまだ良かったといえるんじゃないかな。今じゃあ、左を切り捨てて、資本への忠誠を誓うというか。その点では、今年の決定大会が決定的だと思うけども、表題は忘れちゃったが従来の行動綱領での「経営参加は労働者に犠牲を強いるから反対」というのが、「労働者に犠牲を与える経営参加には反対」と変更になって、実質的には経営参加にOKが出た。とくに「労戦統一」問題では全金が同盟・JCからやり玉にあげられてきた歴史があるわけですが、全金の中でも大手は支部というのは、明らかにJCとやってることは同じで、「統一」してもおかしくないよ、というわけです。現実には全国金属がかっての現場での闘争を軸に強化しようということから、大手組合に脱退させられたんじゃあ困るから組合経営をもう少しうまく考えよう、というところにきてるわけね。だから大手組合のいうことは無条件にきいちゃうわけですよ。

B　数でいえば、三分の二は大手でしょう。その意味では全金ももうアウト。（笑）

下層未組織や争議団での新しい闘いの息吹き

――進行する「労戦統一」の中で、明確に切り捨て対象となっている全造船、全金の闘う部分や、あるいは地域合同労組運動をどうおさえこむのか、が彼らにとっては問題になっているともいえるけど、Dさんのところなんかはどうですか。そもそも論外（笑）みたいな感じだけど、地域の中小というか零細企業の未組織労働者の組織化の闘いの中では、一体「労戦統一」というものがどういう風に見えてるのか。

D　僕らは何ていうか、日本の労働運動の流れを下から見上げてるというか、はたからながめてるという印象が強いので、なかなか話がかみ合わないと思いますが、総評大会なんかを遠い話として見聞きする限りにおいて、既存の労働運動の勢力をどのようにくっつけ、切り捨てて資本との相対的力関係をなんとかしようかということでしかないんじゃないかという風に受けとめています。だから、「労戦統一」や、富塚がこれ以外にないとかいっても、僕らのところではっきりいってチンプンカンプンでわからん、としかいいようがない。しかし片や、僕らの狭い、小さな経験の中ですが、既成の幹部とは違って、下へ行けば行くほど、労働運動をこうやっていこうじゃないかという新しい息吹きがあることは確かです。何の統計だか忘れたけれども、未組織の労働者が既成のナショナルセンターの動向であるとかについて関心があるのかといえば、自分の賃金や労働条件と同じように、関心はきわめて高いですね。労働組合についても半数以上が必要だと考えている。しかし、僕らの〇〇地区での組織率は、わずか一五％全国平均にも満たない。こういった中で、労働者階級の将来、将来とはいかないまでも現状を確保し、改善していくためにはやはり八五％の、全国的に見れば三分の二ですか、の未組織労働者の組織化という道を進むしかないんではないかと思うんです。

未組織職場で、総評がこんな風にいってるよ、といったって全然相手にされないし、これは意識が低いとか、知識がないとかいうんじゃなくて、非常に素朴ではあるけれども、そういう労働運動の方向が自らの要求にそぐわないことを知ってると思うんです。これは下層未組織だけじゃなくて、分裂少数派組合とか、争議団とか、階級的というか原則的に闘い抜いてる、さっきのCさんの本山闘争のように、あるいは沖電なんかも、「労戦統一」が敵対物になっていると思うんです。まだ「統一」されていない、いわばそういう動きがあるという段階にもかかわらず……。

B　そうね。沖電機の指名解雇撤回闘争をみれば、そこら辺はっきりしてるね。総評、地評の幹部は「労戦統一」がらみで、中立労連（―電機労連、沖電労組の上部団体）との関係で動きたくない。争議団をめぐる問題において、沖電は右翼的「労戦統一」との関係では象徴的な存在といえるんじゃないかな。それと、日共、協会、反戦という日本の左翼勢力の中で、激烈な、時にはぶっとばし合いも含めてやってきた部分が、総体が右に行くに従って浮かびあがってきた。

こういう時に何をやるのか。日共は新ナショナルセンターをぶちあげる。これは左の日和見主義としての対応ですね。反戦派といわれてきた人たちも、何か小じんまりとやろうとしている。それじゃ、日本の労働運動のヘゲモニー、主流派にはなれないと思うんです。

反マル生闘争を放棄し「統一」へ進む全逓民同

――さて、今までの民間での話と違って全通の方はどうですか。まあ公労協の中の左派を自称し一昨年などかつてない越年闘争という大昂揚を下部の労働者の戦闘力によってつくりあげてきたわけですが、去年は、わけのわからないうちに早々と越年闘

職場を闘う労働者の戦場につくりかえる

争はやらない、前年末からの懸案事項に関しては妥結する、ということが表明され、八一年のPTTI加盟問題も含めて、全郵政との合併問題というやつが一方では条件づくりとして進行していると思うんですが。

E　まあ、去年の全国大会なんかの問題でいえば、七八年マル生闘争の昂揚をどういう風に消すかというのから始まって、そして富塚なんかが来賓で来たこの前の十月三十、三一日の中央委員会では、すぐ方針化される重要な議案書が（事前に職場に配布されるのではなく）現地提案され、そこでは、もうすでに年末闘争なんかもすべて実質的には妥結されてあって、いわば中央委員会は、マル生賃金の妥結も含めて、いかに皆を納得させるか、という論議の場になって組合民主主義すらふみにじられてる状態になっちゃってる。

――現在、全郵政との関係はどうなってます。

E　これはかなり地方的な差異があって、東京というか、都市部は全郵政に切り崩されたりしてる競合関係もあるし、そういうところでは感情的対立も含め、こいつらとは絶対にいっしょにやれるかっていう感じはあるけど、地方はちょっと違う。こういうと言いすぎだけども、全通の方が圧倒的多数を占めてたりあるいは全郵政が全く組織されてないところなんかじゃ、最初から（全通自体が）第二組合みたいで（笑）だから「労戦統一」も、職場闘争があるところはともかく、ないところは、スッと入っちゃうみたいな傾向はあるんじゃないかな。

――さて、そういった現状を踏まえて、更に皆さんにお話を伺いたいわけですが、八〇年代に入って、先進的労働者の任務は何か、私たちとしては「社会主義労働運動の創建」をめぐって、「労働組合運動の戦闘的階級的再生の方途とは」について、この間、去年の東京反合総行動などに注目してきましたが、右翼的「労戦統一」に抗する闘いと、そういう力を具体的にどうつくり出していくのか、その運動的かつ組織的展望について、お話ししてもらえれば……。

B　やはり毛沢東流にいえば「作風」の問題なんだろうな、左派活動家の。職場でのヘゲモニーを握れる活動家になることだろう、それなくして多数派になれない。敵の方は、あの有名な日経連の桜田がいうとおり、職場さえ安定してりゃ大丈夫って踏んでるんだから。こっちが向うの戦略的ポイントに切りこめないのは、こっちがいたらないからだろう。少数派での「負け犬根性」を払拭し、八〇年代という時代の変わり目の中で、本当の意味で「共同闘争」や「統一戦線」の思想が試されると思う。それも空論的にではなく、佐伯（全造船佐伯分会）や、沖電なり具体的な闘争をめぐって、同じ土俵に立てばあとは方針論議なわけでしょ。それは一つ一つ実践の中で試されるし、その中でどうやれば大衆的な影響力を強め、しかも資本に対して攻撃的な力となるのかを論議していかなければ本当の意味で「労戦統一」には勝てないだろう。

A　私なんか「経営参加（ZD運動）に非協力」ということで首切られたわけだけど、その中で公然と職制支配に、といってもそんな格好いいもんじゃないけど、反抗したわけ、六千人の工場で一人しかやってないから目立つわけね。（笑）でも、そうやってるうちに職場の労働者が、結構一人でもできるもんだなあ職制も大したことないもんだとか、全然かわっていくわけね。合理化なんかが出されたら、やる時やらないとケツの毛まで抜かれちゃうよ、と職場の労働者が平気でいうようになって、職制の権威なんか落ちていくわけよ。何ていうか、職場闘争っていうのは労働者をかえるし、どんな厳しい職場でも、こっちの争点の作り方でなんとかなるのが職場闘争だと思う。

レベルは違うけれど、佐伯なんかも、あそこでガンバったから九州の中小、五〇人から一五〇人ぐらいのところが（全造船に）入ってくるんだよね、この間も長崎で分会が結成されたし。佐伯を守り、つつみこんでいくなかから、それとかみあわせる形で職場闘争を組織していくことが大事なんじゃないかな。

E　僕らのところは、全通だけでなく官公労や大単産なんかそうだと思うけれど、労働三権の上部委譲で職場闘争そのものが形骸化され、幹部請負・代行主義が蔓延してるし、幹部の組合統制が強い。だから、職場闘争っていうのも、こう発想を変えなくちゃならない。例えば分会レベルでは、これが一つの町工場の組合だと思って、大衆的な組合運営からはじめるしかない。もちろん統制は厳しい。そこらへんうまくいかないのが実情だけど……。

B　公労協とか地公なんかは財政から、何から何まで「中央集権で、賃金交渉からして、全部中央でやってるわけでしょ。職場でやれるったら「あそこの電球つけろ」「つけない」（笑）程度の話になっちゃう。だからこっちにも全国的な問題として立てる必要があると思うわけ。向うの権力の集中の仕方が全国的になってる以上、こっちも全国指導部でもって対応、戦術を出さなくちゃいけないと思う。敵も地域差攻撃を仕かけたりしてるんだから、こっちもちゃんとしたヘッドがなくちゃダメなんですよ。

大衆の信頼を組織し階級としての闘いを

A　狭山とか三里塚なんかに関して、うちの組合なんか不熱心だといわれてるけど、そうじゃないんだよね。職場で一番活動してるやつなんかが提案するかどうかにかかってるんだよね。労働者ってのは見る所、見るし、きちんと闘えば、戦闘的になっていくし……。職場ほったらかして、狭山だ、三里塚だっていったって、ダメなだけで。

D　Aさんのいわれたことと少し違うかも知れないけれども、僕なんか教科書風にいえば労働者が本当の意味で指導階級であるというか、なれるのかといえば農民の闘いや解放同盟の闘いに、単に支持しますとか支援しますとかじゃなくて、自らの闘い、労働者階級としての闘いと結びつけなければならないと思いますし、そういう意味での職場闘争というものを考えていきたいとは思っています。

労働（組合）運動を資本主義の墓掘人に

――総評というか民同労働運動がつくりあげてきた労働組合運動の「常識」、つまり企業内主義とか本工主義とかいわれるものや倒産すればそこで組合運動は終りだとか、あるいはもっと大きく春闘方式と呼ばれるものも含めての様々な「常識」に対して、その「常識」をこえてきたところで、今様々な闘いが始まっており、闘い抜かれているという風に思っているわけです。そういう時代に対し、意味付与ではなく、帝国主義労働運動に屈服し、からめとられていく民同・改良主義労働運動に対置して、あるいはそれときちんと分水嶺を引くものとして社会主義労働運動の課題があると思うんですが、既成の労働運動への批判だけではもはや、やっていけなくなった、「労働情報」なんかでも「社会主義をめざす労働運動」とかが、中味はともかく論議されはじめたのも、そういうあらわれだと思いますが、しかし逆に、総評、民同指導部の右傾化、その改良主義の破産が白日の下にさらされてる時、今の左派が昔の民同と大体、同じことをやってるだけで左派性が保てるという、悪い時に入っているという気がしないでもないですが。

B　そうなんだろうね、もう民同なんか、そもそも闘争もなにも組まないでしょ。赤字なら賃上げなんかいりませんていう論議でしょ、極端化していえば。要求づくりの段階から、もう「パイの論理」そうなりゃ左の側が一にぎりの本工エリート社員と厖大な臨時パートという構造の向うの労務政策に対して、どう打ち破っていくのか、同じ工場での差別雇用や、賃金体系の査定や格差とかを含めてどうするのか。

C　本山の場合でも、僕らは全然変ってないんだ、変ったのは向うだとみんな思っている。向うが変った結果として統制処分とか、除名とか、ひでえことをやりやがった。どうやってしっぺ返しをしようか（笑）ということなんですよね。本山の場合でいえば問題はやはり労働者と経営者の争議なんだということ。全金を除名されたということは総評を除名されたということで僕らとしては、本山資本との闘争を勝ち抜き、なんていうか、「俺らこそ労働組合なんだ！」という主張をトコトンやり抜いていきたいと思っている。そうすることで総評労働運動とか、「労戦統一」とかがはっきりするわけで……。

B　まあ労働組合ってのは賃金や労働条件の問題につきるわけよ。ただ結果として資本主義を救済するものになるのか、逆に墓掘り人になるのかでしょ。

D　僕らはまだ駆け出しだけれども、それでも二十年、三十年労働運動をやってる幹部を批判できるのは何なのかといえば、それは簡単に言って、彼らが何十年労働組合を指導しても、民同労働運動っていうのは、所詮資本主義の労働運動じゃないか、僕らがやろうとしているのは社会主義の労働運動なんだ、ということだと思うんです。そうなってくると、それは労働運動の課題というよりは政党の問題にまで行きつかざるをえないんじゃないか。

――さきほどのBさんの全国指令部の必要性と合わせて、私たちは社共にかわる労働者階級の前衛党建設をもって応えていきたいと思っています。

そのためにも、本日お忙しい所をかけつけて下さった皆さんが、今後とも一層、我が党への御協力をお願いして、座談会を終えていきたいと思います。どうもありがとうございました。

（文責・編集部）

被災労働者の団結とすべての労働者の力で労災法改正闘争の勝利を！

12.2結成集会

十二月二日、東京・労音会館において、「全国から三十団体、百余名の結集で、「八〇年労災保険法改正を闘う被災労働者全国協議会」結成大会がかち取られた。今年九月五日、労基法研究会による労基法改悪＝解雇制限の緩和の報告、十一月十七日、労保法改正に関する公益側試案の提出という事態の中で集会は、被災労働者の独自組織の意義を中心にすえた基調報告労災保険法の抜本的改正に向けたアピールが全員で確認された。更に全港湾伊藤氏は、公益側試案がわずかばかりの保険率、特別支給金の引き上げとバーターに、民事訴訟をおさえ、使用者の安全保障義務という債務不履行責任の迫及回避にそのねらいがあることを鋭く暴露した。続いて愛知、スタンダード・バキューム労組、大阪、京滋、神奈川、東京の被災労働者全造船鶴造分会村山書記長、慈恵医大青戸病院の山本さんから、闘いの報告と決意が行なわれた。

この結成大会を受け、翌三日、労働省交渉を開始した。まさに、「被災労働者の団結と全ての労働者の力で八〇年労災法改正闘争を勝利」（大会スローガン）することとくに五月東京集会の勝利に向け被災労働者を先頭に、更に広汎な闘いを組織することが急務である。

労働者の団結を誇示する闘いの号砲

12・4田中機械闘争を勝利させる集会

「12・4田中機械闘争を勝利させる集会」が一二月四日、大阪市立労働会館で、一四〇〇人を越える労働者の結集で開催された。

主催者代表（武本全金大阪地本委員長）は「今日の田中機械の闘いは、減量経営からの破綻・倒産ではなく、資本、関経協が一体となり、戦闘的労働組合を壊滅させる計画倒産である。だからこそ、一人でも多くの労働者が物心両面からの支援をしてほしい。また今日の田中機械の闘いは、今後、日本における労働運動の闘いを左右する闘いに発展する」と力強く、集会をよびかけた主旨を鮮明に提起した。

そして続々と発言に立つ大阪における戦闘的労働組合運動の指導的労働者は異口同音に「争議が起これば、真夜中であろうと、なんであろうと争議現場へ駆けつける体制が必要。全金田中機械の闘いが今日まで持続し、発展してきたのは一年三六五日休みなく常駐体制が貫徹され、実行されているからこそである」と生活と闘争を固く結びつけ、地域にしっかりと根を張り、闘いの実践を通して団結を打ち固めてきたことが生々と語られた。

そして全金田中機械の大和田委員長によって経過報告がなされる。

「今日の田中機械の闘いは、企業内組合の枠から地域への運動を切り拓いてくる中で、鍛えられてきたといえる。地域共闘の結成とその前進は、それ以降、関経協において全金対策が特別に設置され、南大阪の地域における組合干渉が露骨……七四年のオイルショックから、七五年には資本のむきだしの弾圧が強まり、『減量経営』の名のもとに戦闘的労働組合に対する組合潰しのための企業潰し』として、田中機械をはじめ多くの企業倒産攻撃がなされていった」「しかし、我々は断固実力闘争で闘い抜くことを固く意志一致し、資本の攻撃に屈することなく、あくまでも労働者の権利を断固防衛し、発展させ、勝利まで闘い抜く決意である。」と宣言し、全参加者の熱烈な拍手を呼びおこした。この拍手は全金田中のすべての労働者だけにではなく、南大阪の、否、関西そして全国の苦闘する労働者の固い団結を誇示する闘いの号砲でもある。

このあと全金・細川鉄工の津嶋委員長から、田中機械への資本の総がかりの攻撃に対して、断固これをはねのけ、闘争を勝利させるべく更なる支援と連帯の訴えがあり、地域の闘う仲間として《血にまみれ、砂をかんでも》闘い抜く決意のもとに「全金田中機械と共に闘う会」への結集が熱烈に呼びかけられたのであった。

日本資本主義の体制的危機の深まりと、日帝の戦争と反動の熱望の高まりの中で、反抗を強めるプロレタリア階級の一つ一つの争議や経済闘争が、右翼的労戦統一に象徴される「経営参加」＝労使協調や「連合政権構想」、すなわちブルジョア階級独裁の擁護か、資本の収奪―生産手段の社会的共有をめざすプロレタリア階級独裁の樹立か、をめぐっての路線的分岐を否応なく突きつけられ、それ故、先進的労働者内部では今や公然と社会主義をめぐる論争が開始されており、それを更に大胆に組織することが問われている。先進的労働者はわき上がる階級深部からの労働者大衆の新たな昂揚を、労働組合運動の戦闘的再生と階級的統一へ押し上げ、右翼的「労戦統一」粉砕の一大昂揚へと、決起を準備しもって社会主義労働運動創建の大事業に着手しなければならない。十二・四集会は、まさにかかる闘いに向けた前進を画する集会であったといえよう。

国内評論

「ヤミ給与」攻撃と、自治体労働者の任務

いま、官公労労働者に対する「ヤミ給与」攻撃が魔女狩りのごとく吹き荒れている。民間企業を中心に帝国主義労働運動の育成をもって労働者階級に対する支配の安全弁を形成した日本帝国主義は、民間、とりわけ中小未組織労働者への一層の搾取と抑圧を強めつつ、官民分断の拡大をはかり、官公労働者への徹底したしめつけを行っている。

彼らはマスコミを動員して、いわゆる「ヤミ給与」攻撃を演出し、「全体の奉仕者」イデオロギーを鼓舞して国・地方自治体を貫いて、一大合理化をおしすすめている。すでに一一月二二日の給与法関係閣僚会議においては、高令者の昇給停止・延伸、定数削減等が明らかにされ、国公平準化の強化のもとに地方自治体への統制が一層強められている。企業整理・大量解雇等労働者の犠牲によって増収増益を得た資本家階級は、官公労においても減量経営の総仕上げをせんとしているのである。そして彼らは帝国主義の腐朽と国家権力の肥大化の極致たる政界・官界の腐敗、高級官僚の汚職構造と抱き合わせに「ヤミ給与」キャンペーンを行うことで、没落と生活不安にあえぐ小ブルジョアや、下層未組織労働者の憤激を国家の支配と社会秩序の維持へと動員せんとしている。

そもそも「ヤミ給与」なるものは、一九四八年政令二〇一号によって争議権、協約締結権という労働基本権を全面的に剝奪され、人事院（地方公務員に対する人事委員会）勧告　制度に封じ込められた公務員労働者が、自らの闘いの中で、限界つきではあれ、かちとってきた「成果」である。それは、数年来、自治省による攻撃の的となってきたラスパイレス指数（国公・地公の格差）が、人勧体制打破に迫りえなかったとはいえ、人勧体制に押えこまれた国家公務員に比して自治体労働者が「勧告」そのものを自らの闘いによって引き上げてきた結果であることを見れば明らか。それ故、この間の「ヤミ給与」攻撃は、部分的ではあれ空洞化された人勧体制の建て直しを目論むと同時に、春闘方式によって逆に民間労働者の賃金抑制に成功したブルジョアジーとその政府が擬制的ではあれ「全国平均給与」たる公務員労働者の賃金の抑制をもって更なる低賃金攻撃へと突き進まんとしている。

だがしかし、他方この「ヤミ給与」自体、人勧体制には指一本ふれず、職場闘争を回避し、ボス交的取り引きに終始した民同等、既成労組指導部の総破産をも照らし出した。革新自治体下での御用組合化の進行とその定着、および日共の「公僕論」キャンペーン等、自治労総体の歯止めなき右傾化は、自らの「闘い」の結果たる「ヤミ給与」を防衛することもできず、闘う前から退却を開始した。

かかる社共の態度が現在進行している右翼的「労戦統一」とその根底において軌を一にしたものであることは言うまでもない。まさに官公労においても改良主義指導部を追放し、「労戦統一」と対決し、その闘いをもって争議団や中小未組織労働者の苦闘に連帯し、共闘する労働運動の構築が急務となっている。そして官公労働者は、自らの賃金・労働条件が一つの「水準」になっていることを自覚し、それ故に、断固として大巾賃上げ・労働条件改善・合理化粉砕を闘いとり、敵の官民低位水準化を打ち破り、官民分断を踏み越え、階級的統一への第一歩を踏み出さなくてはならない。

闘いの現場から

自治体合理化と「ヤミ給与」キャンペーンが吹き荒れる中、横浜市当局は今年の年末一時金闘争において、「一・五カ月分」への「〇・〇九カ月分上積み」とバーターで十大都市の先陣を切って「昼休み窓口開設」を目的とする合理化セット提案を行い、妥結以前に早々とマスコミを使っての世論形成を行うという暴挙に出たのである。あろうことか市労連・市従本部はこの合理化攻撃に対し「改善委員会設置による形骸化」という「取り引き」でこの合理化セット提案を受け入れたのである。

すでに現場の労働者は、「窓口開設」の当該職場＝区役所のみならず、全市従的規模で、昨年実績を下回る低額回答もさることながら細郷市政誕生後の合理化攻撃を鋭く見抜き、M支部での連日にわたるビラまき、職場集会、他支部への情宣オルグ活動という大衆的実力闘争を先頭に、十二月五日での中闘における集約で賛成六支部・反対二二支部・保留三支部という圧倒的な票数で市労連・市従本部の妥結提案を拒否したのである。この年末闘争は、社共既成指導部の反動性を大衆的に暴き出し、彼らの「指導性」の崩壊を示すと同時に、先進的労働者が労働組合運動の階級的戦闘的再生に向け、彼らに代って闘う主導権を確立することが急務となっていることを示している。

横浜市従労働者・M

農民の巨大な砲火を！
二期決戦の勝利へ！

十四年に亘る三里塚闘争は、政府―空港公団との、文字通り非和解的な闘いであった。実力闘争を堅持した闘いは今日、「三里塚のように闘おう！」を合言葉に全国各地で闘う労農学、被差別大衆との巨大な奔流へと発展している。そして昨年、もう一つの推進軸として〝闘う農業〟の建設が打ち出された。これは単に政府の政策（成田用水、農振策等）への「対置」あるいは、直面する問題の解決策にとどまるものではなく、〝農民（農業）の未来〟を誰に託すのか、また誰がひき受けるのかを問うている。然り！　労働者と農民の団結＝労農同盟建設への闘いが開始されたのだ。

座談会
青行隊、大いに語る

出席者

石井恒司氏（東峰部落）
小泉英政氏（　同上　）
寺内欽一氏（中谷津部落）
熱田　誠　氏（横堀部落）
阿部　氏（東峰団結小屋）
司会　本紙編集局

闘う農業建設の模索
――そして実践の中へ

司会　年末のあわただしい時期、皆さんに集まって頂きありがとうございます。私達としては今日の座談会の中で、反対同盟―青行隊の皆さんから新たな闘いの指針として九・一六に提起された四項目方針について、七〇年代をふりかえりつつ、その経過、背景など、また八〇年代への抱負などをもまじえて、ざっくばらんに話して頂き、その中で三里塚闘争の展望と真の労農同盟建設に向けた道はどこにあるのか、ということを把んでいきたいと思います。

まず最初に、今年の夏いろいろと話題になり論議になった「話し合い」問題についてですが、この問題についての青行隊の受け止め方や論議の経過など、また四項目方針の提起との関連について話して頂きたいんですが。

寺内　やっぱり七月段階で新聞に書きたてられたってのは、今まで実力闘争でやってきた十四年の闘いの中で異例なことだと思うし、大きな問題だったと思うよ。いま反対同盟は、話し合いなんて気にしないで、どこまで実力闘争ってのをやり切れるのかが問われてると思うんだよな。

小泉　今年をふりかえって思うのは、六月頃かな、いっしょに闘ってきた農民どうしが疑心暗鬼に陥っちゃって、互いに不信感を持ち合うところが一気に出てきたって気がするのね。十四年の闘いの中では、今までもそういうことは何度かあってさ、まあ闘いには波があると思うし、盛り上がる時もあれば、逆のときもあるし。三里塚ってのは、いろいろ壁に突き当ってきたんだよね。あの問題も、そういう壁の一つだったし、だから島たちの考えもみんなで共有しながら、みんなで問題を克服していこう、乗り越えていこうと思ったんだよね。

石井　話し合いというか、政治決着というか言い方はどうでもいいんだけど、確かに多くの疑問はまき起こったかもしれないけど、それがスッパ抜かれたことによってね、こう、マゴマゴ、フニャフニャしていた同盟が、ピシーと生き返ったと思うんだよね。

それでさ、生き返っちゃえば、もう話し合いもクソもないんだよ！（爆笑）

司会　災い転じて福となす！　ということですね。

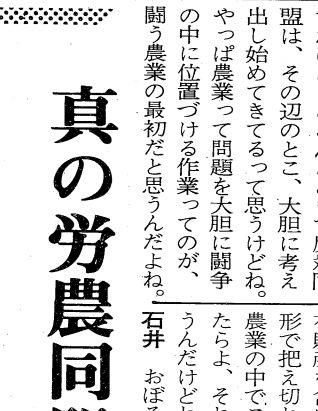
一同　そうそう！（笑い）

寺内　やっぱ、緊張するってのは大切だよな。いつまでも平々凡々じゃダメだよな。

小泉　青行隊が九・一六、木の根用水の頃から、わりと闘いの前面に出てきたわけだけれども、農民どうしが疑心暗鬼になってるさまを見て、これじゃ本当にしょうがないと、やっぱ俺達がやらなきゃダメなんだなっていう思いがあったからこそ、またみんな起ち上がったと思うわけ。青行隊ってのはみんな闘いの中で青春を過ごしてきたわけで、七一年の九・一六以降、主に裁判のこととか東峰事件で一生懸命で、他の活動はあまり前面に出てやれなかったんだけども、しかしながら三里塚で暮して百姓やって闘いに参加してさ、一人〈は非常に成長してると思うんだ。そういうことの表われが今回の政府の　話し合い攻撃を乗り越える力になってきてる。やっぱ、十四年の中で少しづつ変わっていることが、話し合い問題という困難な事態に直面した時さ、その変わってきた、蓄積してきた力が試されるっていうか発揮されるってのが、今回の四項目提案なんかに表われていると思うわけね。

阿部　反対同盟は十四年の闘いの中で、農業経営の規模の違い、土地の広さ、良し悪し、家族の人数など、いろんな意味での違いを乗り越えて、空港を絶対に廃港へと追いこんでいくという団結を守り抜いてきたと思いますが、全国で闘われてきた様々な農民運動・住民運動などをふり返ってみると、闘いの持続力という問題で、どうしても自分の生活基盤と闘争ということが矛盾をひきおこして、最初に生活基盤の苦しい人達が脱落し、身をひいていく、ひかざるをえないという一つのパターンみたいなものがあると思うんですよ。そういうことを克服しようとしていく鍵として、また現に克服しようとしてきた経験なり教訓の集大成として「戦う農業」建設があるんじゃないかと考えるんです。そういう点から、三里塚での教訓・経験やみなさんの持っておられるイメージなども含め、「戦う農業」について、どうですか。

石井　生活基盤の問題で闘いが続いていかないって話ね、やっぱ三里塚もそうだと思うんだよね。数的に見れば、いま反対同盟何戸あるかって言えば、二百戸か三百戸でさ、昔は、全然そういう規模じゃなかったしさ。もう一つ〇があった組織だったわけだよ。農民が徐々に押し切られていく歴史というか、あったわけだよ。そういう中で闘う農業ってのが、そういうことが問題化されてくるんじゃないかな。闘う農業の建設ってのは十四年間の反対運動を総括したものだと思うんだよ。やはり農業で食っていけないとかさ、弱小農家ってのは、闘争の最初の段階で落ちてくってのが、農業の問題でだと思うよ。



熱田　それはやっぱあるよな。俺なんか、ある人から「今、反対同盟のうち農民で残っているのは、中農以上で、だから闘ってられるんじゃないか」って言われてよ、俺はそういう考えには否定的だったんだよな。「そんなことねえべえ、闘う気持がある者が残ったんだっぺ」と。

でも最近思うのは、やっぱり農民として農業で食っていける基盤があったから、やってこれたとこあると思うよ。確かに、それが闘いを支えるものとして強みを持ってたと。

もう一つ思うのは、小泉さんみたいな、強制収用で土地をなくしちゃったものが、今、東峰の部落で一軒のうちを構えて、闘争しながら、百姓しながら、暮してるってのは、三里塚闘争の中では、すごく突出した面があるんじゃねえかなと思うんだ。本当に農民どうしが闘争や生産まで、小泉さんみたい共有化してけるとすればさ、農民の闘いってのは変わっていくんじゃないかな。三里塚なんか、これからの運動ではもっと〈農民自身が模索していけば、もっと面白くなってくと思うよ。

阿部　その辺の話はどうですか？

小泉さん。闘う農業を提起していく背景には、この間の有機農法や共同出荷などという経験などがあるわけですか？

小泉　なんていうかな、そういうとこまでちゃんとやっていかなきゃあならないんだ、という思い入れとか希望は非常にあると思うわけ。今、木の根が一応完成して、闘う農業の第二弾として菱田地区の基盤整備を提起してるわけだけど、現実は中々難しいところに置かれてると思う。木の根風車みたく大事業的にやろうとすれば、多くの農民が参加するわけだけど、菱田地区なら七～八十軒あって、それにまたがる大事業ってなるといろいろ無理があるわけ。例えば田んぼに力を入れる人もいれば、畑に力を入れる人もいて、今の田畑の状態に満足している人もいれば、深んぼで苦労している人もいるわけで、それこそ経営規模の違いとか様々な違いが出てきて、どうしても互いの利害の壁にぶち当ってなかなか進まないと。だからむしろ僕が考える闘う農業建設のイメージは、例えば微生物農法の会がやってきたみたいな、五、六人あるいは十人くらいの単位での、大事業ってことに対しての小事業っていうかな、小事業なら非常に融通も効くし、だからそういう実験というか訓練を積み重ねていって、いろいろグループができていって、それが全体で連なりながら全体としてせり上がっていく、というような中でね、初めて大事業にうまく着手していけるんじゃないかって思う。

寺内　最近、農業関係の集会に出る機会があってね、百姓の問題ってのが、三里塚の問題のあとに有機農法、無農薬の問題が、流行とは言わないにしろ、必ずどこへ行っても出てくるのね。ワンパックなどでは、闘っている人達との流通における一つのそういう交流ってのはあるわけでしょう。でも全体的に見ると日本の中の多くの人達との関わりってのは、そんなにないわけだよね。その辺のところが今の農政の体制とか、農協体制に取りこまれているじゃない。それをどうぶっ潰していくかってよくわかんないけど考えるわけね。俺らとしては、闘う農業っていうものを一つの地域の問題ではなく、それが日本の中で全体化できるような一つの運動を作っていけるんじゃないかと思ってる。

石井　今出されてる戦う農業ってのは、少なくとも今までの反対闘争で農民が主導権をもって闘ってきたわけだけど、直接空港に通じる問題には、かなり真剣な討論なりがなされてきたと思うわけで、しかし、こと闘争の基盤である農業については、そんなにふれてこなかったと思うんだよ。その辺がね、十四年間の総括としてなければダメだと思うわけよ。さっきの「結局、残っているのは中農富農じゃねえか」って話、確かにそうだってことになっていくわけで。だって生活の問題から言えば、食えなきゃ土地を売らざるを得ないってことがあって、結局、食えない部分は売ってったしさ。

それでなんとか百姓をやっていきたいと思えば、闘争やる以外にないわけだ。やっぱ、百姓にしがみつけばつくほど、闘争に依拠しなきゃなんねえんだな。それが闘いになっていくわけだ。今の政府の進める農政ってのは、その大規模化、近代化、集約的な団地化していく方向でしょう。そういうときにさ、俺ら中農だっていわれてる者が、もう何年か先いったら弱小農家になっちゃうんだよな。そうなりたいとは思わないわけで、まだまだ百姓やっていきたいわけだからさ。これから先、闘争も農業も含めて展望する時、じゃどうしたら闘争できんのか、百姓できんのかっていう、その問題のたて方だと思うんだよ。闘いの中でどういう風に、闘いと今の農業、これからの農業を関連づけていくのかってところをね。

「闘いの生活化」って戸村さん言ってたけど、ここんとこきて反対同盟は、その辺のとこ、大胆に考え出し始めてきてるって思うけどね。やっぱ農業って問題を大胆に闘争の中に位置づける作業ってのが、闘う農業の最初だと思うんだよね。

小泉　中農でも富農でも俺はいいと思うわけ。農業をやっていける良い条件を持ってることにこしたことはないわけで。それを闘争の中に生かしていけばね。俺は新しい闘いの方法を発想していく基盤は、やはり農業なり生活の中にあると思う。だけど今の農協体制の下で、ずっと百姓やって暮していては、そのサイクルから出てくる発想には限界があるよ。だから、闘いの中から新しい農業のあり方を求め、又農業から新しい闘いの方法を生み出していくような、相互の作用っていうか、互いに刺激しあうという様な形を作っていこうと思うわけね。

熱田　今、富農でも中農でもいいって言ったけどよ、その生かし方ってよくわかんねえよ？

小泉　だから、それはさ、個人的に私有財産を蓄積しようと生かされちゃあ困るよ！（笑い）

寺内　ほんとにそうなんだよ。さっき熱田が言ったみてぇによ、こりゃカッコいい話かも知れねえけど、俺ら百姓は、自分名義の生活手段としての土地があるんだけどよ、その辺のところがよ、反対同盟用地内十五戸といわれるところにおいてよ、ほんとに土地取られてもよ、反対同盟全体が土地や私有財産を含めて援助するんだって形で把え切れていったらよ、闘う農業の中でこれができていくとしたらよ、それはすごいもんだと思うんだけどね。

石井　おぼろげながら、そういうことはわかってんだけども、やっぱし今までの個人の私有財産制の中でね、農家ってのは働けば働くほどお金になる構造になっているわけでしょ。それがさ、災いしていると思うんだよ。どこまで行っても。

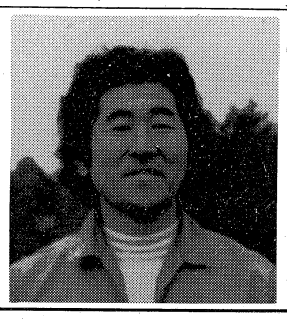
十四年間、土地売って脱落していくのを見てきたけど、前々からあそこは売るとか売らねえとかさ、みんなわかってんだ。だいたい農家ってのは、あそこで何作って年間これぐれえだから、まあ、あそこは苦しいとか裕福とかわかるわけね。だいたいドンブリ計算だからさ。でね、土地を売ってくってことが見えてて、それがわかってんだけど何も言えないわけよ。だってそれ以上言ったら、相手の経済の問題に触れるわけで、ヘタに触ればエライめにあうよ。

小泉　それはこちらだけの問題じゃなくでさ、相手の方の悩みとか互いに相談し合って、一緒にやっていこうということをしないとね。お互いにそれに触れ合わないと。やっぱ、どう互いの生活の中味に立入っていくかという問題だよね。

寺内　生活形態の変化ってのもあるよな。七〇年頃かな、俺ら闘争を始めた頃麦だけ作って、あとはヒマだって時あったもんね。それでも経済的には生活できたってことあったし。強制測量が始まった頃から第一次、第二次執行までは、けっこうそのくらいのパターンでやってたもんな。でそのあたりからだよ、バーンと変ってきて、ハウスだとか施設園芸だとか何んだかんだ騒ぎ出して、それに追っつかなかったら、本当の百姓じゃねえみたいに思いこまされちゃってよ。なんとか追いつき追いこせでやってきたのが現実なんだものな。

石井　近代農業さ……どっぷりなんだよな。

寺内　俺、いつも思うんだけど労働運動って一体何なの？　資本を潰す運動なの？　それとも日本を作りかえる……自分たちを解放する闘いなの？　それとも賃金闘争なの？　どっちなの？　俺なんか考えられるのは、春闘とかボーナス賃金上げ闘争とかしかないわけ。表面的には、今の労働運動の流れってのは、それに象徴されるわけでしょ。そういう中で首切りや合理化の問題、いろんな問題を闘おうとしてもね、本当のところはどうなのかなって気がするんだよ。右傾化される、されるって言っているけど……。



石井　よく敵は一つだって言ってるけど、実はさ、本心で言っているんじゃないんだよね。すぐに敵は権力だ！　資本だって言ってみても、なんか空文句というか、空回りしてるって感じがあるんだよ。農民も労働者もお互い今の資本構造の中にどっぷりつかっちゃってるわけだよね。

熱田　きびしいことだけど、俺らが農業の問題に本当に触れようとするのなら、やっぱ全国の農業の抱えている問題に対して積極的に関わっていくべきだと思うよ。三里塚の十四年の闘いの内容を全国の農民運動の中に問題として提起するなり、又俺らが問題を受けて考えるなりしていくことは、必要だと思うし、そこでは俺らが農民だけの問題として考えるんじゃなくて、労働者の抱えている問題や闘いも、闘う農民として考えるってこと絶対不可欠だと思うんだ。

小泉　今、神奈川でサイバネットという工場閉鎖と闘っている労働者に、ワンパックで残ったものだけどカンパしてるんだけど。なかなか時間がなくて、そこの労働者とゆっくり話せないんだけど、これからも続けていこうと思ってる。労働者との交流ってのは、いろいろな形があるけど、俺らからだったら、闘ってる労働者の食糧は闘ってる農民がひき受けようっていうか、具体的なつながりの中で、互いにわかりあっていきたいと思うよ。

真の労農同盟の道を求めて

司会　ここ数年、三里塚闘争に参加する労働者が様々な弾圧や妨害をはねのけて増えてきていますが、政策推進労組懇の様に「農民過保護論」をもって、ブルジョア農政による農業破壊―農民殺し政策を積極的に支持する部分も出てきています。三里塚闘争の中で真の、確固とした労農同盟を築き上げるためにも、全国の労働者や労働運動について、どういうことを考え、何を望むか、率直なところを聞かせて下さい。

小泉　いろんな労働者の集会へ行って話をしてみると職場の問題も三里塚も同じだと思うね。例えば、仲間をどうまとめていくかってあたりはね。三里塚だからできるってよく言われるけど、やっぱり同じだと思うよ。三里塚だからできるんだって言っちゃうと、三里塚と労働者の間が切れちゃうんだよね。例えば、大木よねの闘いに対して、あれは一人だから、貧しいからあそこまでやれたんだと、そう言って自分と切るわけでしょ。そうじゃないんだと。大木よねは別に普通のおばあちゃんでさ、その普通のおばあちゃんが闘ったんだ、と把えることによってつながる。

（七面へ続く）

激闘の80年へ、社会主義革命をめざす労働者と総力をあげて三里塚

12.16 二期決戦勝利への戦闘布陣打ち固める

一二月一六日、三里塚第一公園において反対同盟主催「事業認定期限切れ居直り粉砕・飛行阻止・二期工事阻止・空港廃港、全国総決起集会」が一万七千の闘う人民の結集でかちとられた。

集会は北原事務局長の「十余年の闘いを総括し、二期工事阻止・廃港へ向けた闘いとして、十二・一六闘争を闘い抜き、八〇年代、三里塚二期決戦の勝利をめざして闘い抜こう！」というアピールを全体で確認し、反対同盟、北富士、日本原の闘う農民、ジェット燃料輸送に反対する沿線住民、部落解放同盟、全障連の連帯アピール、支援団体からのアピールの後、敷地内一五戸の農民が圧倒的な拍手の中で登場し、「用地内農民は、切り崩しや、弾圧に屈せず団結して二期工事阻止・空港廃港まで断乎闘い抜く」という決意表明を受けた後、反対同盟を先頭に岩山までのデモンストレーションに出発した。

デモ終了後、再度部隊は野戦病院前に結集し、恒例のたいまつデモと、種々の闘争を貫徹し、南からの飛行を実力阻止し、更には、北側での実力闘争とあわせて、この日の闘争を勝利のうちに終了した。

「既成事実」化に一大痛打を浴びせよ

この日の闘いは「三里塚闘争の最先頭で闘い抜いてきた戸村委員長の突然の死のかなしみを新たな闘いの決意に！」(十一・一〇追悼集会)事業認定期限切れを、一期工事完成―「開港」という名の下に居直り、その既成事実化をテコに二期着工を目論む政府―公団の野望をあばき、「話し合い」―同盟分断策動を打ち破り、「戦う農業建設」「飛行阻止闘争」で二期工事阻止・空港廃港を実現する七〇年代最後の闘争として闘い抜かれた。

この十二・一六闘争の勝利にはっきり見て取れるように、三里塚闘争は、十四年の闘いの中で、その勝利―空港廃港の可能性を、ますます鮮明にしている。

五・二〇強行「開港」によって、三里塚闘争の圧殺を目論んだ政府―公団の意図とは逆に、騒音、燃料輸送問題でますます矛盾を増大させ、闘争を拡大・激化させている。また「開港」によって空港の防衛線は伸び切り、飛行阻止闘争を始めとした現空港に対する攻撃は「開港」の既成事実そのものを掘り崩している。

さらに同盟分断を画策した「話し合い」も反対同盟の拒否宣言によって破産し、農振法―成田用水も、木の根かんがい事業の成功に見られる戦う農業の推進によって逆に反対同盟の団結をさらに強く打ち固めることに結果している。

また先進的労働者は、戦争と挙国一致にむけた「右翼的労戦統一」に対し、戦闘的・階級的労働組合運動を防衛し、三里塚闘争への連帯の闘いを動労千葉を先頭にますます強めている。

以上のように三里塚闘争の局面は、ますます我々に有利な条件を生み出している。

政府・公団の二期工事着工を打ち破り、空港廃港を実現するために、この有利な条件を利用し、さらに闘争の質を発展させなければならない。

発展の萌芽を社会主義へ育てあげよ

九・一六集会における青年行動隊の四項目方針は、まさに三里塚闘争の新たな発展へむけた提起として断乎支持しなければならないものである。この四項目方針は、十四年の闘争を総括し、二期決戦の勝利をめざし、反対同盟の団結を強化し、実力闘争を堅持し、新たな発展をめざしたものであり、一部諸君の「二期決戦に対する日和見主義的動揺」などという主張は断乎として批判されなければならない。また「飛行阻止」「戦う農業」のどちらか一方を主張する部分も、真に三里塚闘争の新たな発展の萌芽を育てることはできないことを明らかにしておかねばならない。

青行四項目方針に内包されている三里塚闘争の新たな発展の萌芽は、十四年の闘いの中で実力闘争の拠点と農業の新しい創造、農民の新たな共同的組織化を通じた集団化として、帝国主義農政の下で減反と生産抑制に苦しむ全国四五〇万農民の闘いの頂点として三里塚闘争を押し上げ、また労働者階級との結合を強めて、労農同盟―社会主義統一戦線結成にむけた内容をはらんでいることをはっきりと見ておかねばならない。

青行四項目方針を支持し、飛行阻止闘争に決起せよ！　第二、第三の戦う農業建設を支援し、二期工事阻止―廃港へ進撃せよ！

12.8 三里塚と神奈川を結ぶ集会開かる

十二・一六の三里塚現地闘争を前にした八日、横浜で「三里塚と神奈川を結ぶ集会」が、東峰団結小屋維持会神奈川事務局よびかけ集会実行委主催の下に開かれた。

冒頭、基調報告は、①十二・一六が「飛行阻止・二期着工阻止・完全廃港」の大会戦と八〇年代日本階級闘争の突破口であること、②「戦う農業・実力闘争・労農団結」の旗幟を鮮明にし、中核派など急進民主主義潮流をりょうがしていくべきこと、③朝鮮人民をはじめとした反帝民族解放闘争との連帯、④社会主義の共同の未来にむけた労働者と農民の団結、を中心に提起された。さらに東峰団結小屋から、戦う農業の意義と二期工事着工阻止への展望、三里塚被告団から、公判闘争報告と強権的訴訟指揮への弾劾、東アジア反日武装戦線への死刑攻撃弾劾・監獄法改悪阻止にむけた発言がなされた。

朝鮮問題に関する発言では、現在の韓国情勢、とくに崔政権の「ゆるやかな民主」の欺瞞の暴露、日本での日韓連帯闘争の現況報告と問題点・展望が報告された。

さらに右翼的労戦統一に対し、職場から反撃している全造船浦賀の労働者をはじめ、労災職業病闘争、港湾コンピューター合理化に反対している川崎市職、横浜市従の各労働者、解雇撤回闘争に勝利した大和製缶田中氏からのアピールがよせられた。

集会は、三里塚―日韓―労働運動を結びつけ、神奈川から十二・一六の大結集をかちとることが確認され、最後に神奈川事務局からの行動提起をうけ終了した。

12.15 学生運動の新たな胎動！

三里塚　実行委結成！

十二月一五日、東京・南部労政会館において三里塚学生集会が開催された。この集会は三里塚現地・東峰団結小屋に結集する学生のよびかけによる実行委の形成を基礎とし、広範な学友の結集によってかちとられた。その基調は、十・二一をめぐる過程であらわれた三里塚闘争の戦術上、政治内容上の分岐の萌芽を、政治思想上の議論として積極的に推し進めると同時に、新たな流動を開始した学生戦線における広範な共同行動を実現するものとして、本会が開催されたことを鮮明に打ち出した。

すなわち政府・公団の「話し合い」攻撃をもってする「既成事実」による反対同盟切り崩しと、以降の二期着工攻撃を粉砕し、実力闘争の堅持と戦う農業建設を掲げ、空港廃港を闘いとる反対同盟四項目提案を断乎行うとともに、戦う農業の萌芽的未来を、帝国主義における農業・農民問題の根本的解決としてつかみ出し、それと実力闘争を固く結合して闘い抜くことが提起された。

現在、学生戦線にあっては、全共闘運動以降の拡散と低迷が他ならぬ急進民主主義の政治指導の限界を暴露し、その対極に無党派大衆の学内主義的傾向を温存してきたといえる。このことは、急進民主主義諸派が自治会運動に党派枠をかぶせることを指導ととり違え逆にそうすることで大衆運動の発展を阻害し、解党主義をまんえんさせてきた結果でもある。学生は「だれよりも意識的に、だれよりも決定的に、だれよりも正確に、社会全体における階級的利害と政治的グループ分け」を反映しており、それ故六〇年代後半から七〇年代への民主主義闘争の全国的な圧倒的昂揚の退潮以降、真にマルクス・レーニン主義的政治指導が求められている。

集会では各学園における政治組織戦、大学当局の反動攻勢との闘い、日共をはじめとした社会帝国主義勢力との攻防の勝利の成果に立って、今後、更に大胆に三里塚決戦に向けて共同行動をつみ重ね二期工区のど真中に位置する東峰団結小屋と連帯し、人民闘争の最先頭に大量の学生大衆を登場させなければならないことが確認された。こうした広範な共同行動が、今後あらゆる場所で追求されなければならない。

12.8 反対同盟との団結を打ち固めよ

〝東京風車の会〟結成さる

去る十二月八日、東京風車の会結成総会が、東京勤労福祉会館に多くの労働者を集め開かれた。この東京風車の会は、三里塚空港二期工区内東峰部落にある東峰団結小屋のよびかけに応え、この日、正式に発足したものである。

総会は、司会の「本日をもって正式に風車の会として発足し、活動を拡大しよう」とのあいさつから開始され、つづいて九月から精力的な準備活動をおこなってきた準備会の代表が経過と基調方針を提起した。

基調は、四項目提案を基軸とした反対同盟の闘いが「話し合い」攻撃を粉砕し、新たな局面を切り拓いていることを明らかにし、四項目提案、とりわけ闘う農業の建設を基調とした闘いを労働者階級が自らの闘いと結びつけ、全人民の闘いへと牽引していかなければならないことを訴えた。

この基調を受け、東峰団結小屋と東峰部落青年行動隊石井恒司氏からアピールがよせられた。東峰団結小屋は、二期工事着工を阻止するために、東峰での闘いがより強められねばならないこと、そのために闘う農業建設を軸に東峰団結小屋を全人民の共有財産、不抜の闘争拠点として打ち固めていこうと呼びかけた。石井氏は、東峰団結小屋の呼びかけを、東峰部落の者として歓迎する、と発言したあと、とくに青行隊が四項目提案をなすに至った経緯を報告し、暫定開港の既成事実化を絶対に許さない連月連日の実力闘争とともに自ら農民としての基盤に立った長期不抜の闘い―闘う農業建設を推し進め、完全廃港へ政府公団を追いつめなければならないと訴えた。

この石井氏の発言は、労働者階級に現下の農業農民問題に対する態度を明らかにすることを迫ると共に、三里塚闘争が、実力闘争を軸にしつつ、農業破壊、帝国主義農政と闘う全国の農民闘争と結合せんとしていることを示すものである。われわれは、かかる三里塚闘争の進路を断乎として支持し、これに応えなければならない。

石井氏の提起が全体で確認されついで東京東部、三多摩などで活動している仲間から「社会主義労働運動の創建と三里塚闘争を結びつけ闘う」決意が表明された。最後に、東峰団結小屋のよびかけで作られた十二・二六闘争実行委からの行動提起に全員が拍手で応え、熱気溢れるうちに東京風車の会結成総会は幕を降ろした。

激動の八〇年代を共に！

(六面より続く)

るでしょ。今の労働運動ってのは現在の農民や農業の抱えている問題とはまったく関係ない所にあるような気がするよ。だから労働者も農民も互いに、もう少しはっきりとつながれる接点を積極的に求めるべきだと思うんだよ。労働運動に何を本当に求めるかって言えばね、労働運動を本気でやろうとするなら、農民や農民運動について徹底的に考えてもらわねばと。そうしないと、やっぱし労働運動ってのはおかしな方向へ行っちゃうんじゃないかと思うんだよ。

司会　それでは最後に革命の旗について苦言・提言も含め、一言お願いします。

寺内　党派ってのは、ちょっと理屈が多すぎるような気がするのね。あんまりにも自分の中だけに限られちゃってるみたいだよね。まあ俺が読まないのが悪いのか？　読めない新聞が悪いのか？(笑い)ほんと常々思うんだけど、なんかもっとやさしくできるものがないのかなと思うよ。ほんと！　どこの新聞もそうなわけ。だから、もっと大きな眼を持ってね、お決まりの文句だけじゃなくて、もっとローカル的なものがあったらいいような気がするんだけどね。だからと言って、やっぱ三里塚において俺ら自身の力だけじゃ、やり切れなかったわけで、そういう意味じゃ全体的な党派との関わりとして三里塚もあったと思うし、まだまだ闘争は続くし、お互いの問題に続かせるためにも、激動の八〇年代を共にがんばっていきたいと思うよ。

小泉　これからもさ、三里塚の前途は、山あり谷ありで紆余曲折だろうと思うわけ。いろんな壁が立ちはだかるだろうけど、それを乗り越えていく力ってのを、三里塚は秘めていると思うわけ。だからあんまり焦らずにしぶとくやっていきたいと思うわけですよ。だから機関紙の話でもそうなんだけども、非常に高度な論理を展開してさ、それを押売りするんじゃなくてね、あー、革命の旗の機関紙だったら読もうか、というような機関紙とその組織の関係があれば万々才だと思うんだけど……ぜひそうなって欲しいと。もっと〳〵革命の旗の力が三里塚で発揮されるよう頑張ってほしいね。

熱田　新左翼のくっついたり、離れたりってのは、俺にはよくわかんねえけどもよ、俺ら青行がよ、いろんな困難を乗り越えてきて、今がんばれるのはよ、この間いろんな議論してきて、いま自分らが論争している問題は自分らだけの問題じゃなくて、また一人の考え方が全面的に通るんじゃなくて、やっぱり全体の考えを聞く中で、更に全体が前に進もうとするからこそ、その中で矛盾が出てきて、最大限議論し合った末さ、互いの考え方の違いで別れていくんじゃなくて、悩んでいることを全部出し合って本当に今、自分らがまとまっていけるものを確認しあって一つ一つの問題をみんなの力で克服してきたからだと思うんだよ。そういうものが、今のいわゆる新左翼には、ねえような気がするんだよな。合併して革命の旗になったんだべよ。だから少なくとも言えるのはさ、くっついた以上は離れねえでやっていって欲しいと思うよ。

石井　革命の旗に期待するって…別にそういう形では特にないよ。でも少なくとも三里塚闘争ってのはずうっと続く……。自分が空港闘争に入る時にさ、かなり迷ったんだよね。つまり最初は、みんなは一年か二年でこの闘争は終るって考えてさ、それだったら一年二年作物つくらないで、ふっ飛んで歩いて空港をどっかに追っぱらえば、あとはその分、またがんばれば農業できんだからって。俺はそういう風に思えなくってね。多分これ、うっかり足突っ込んだら一生さぁ闘争に関わる以外ないんじゃない、かってとこで悩んだわけね。でまあ、悩んだ結果、多分一生続くだろうと俺は思ってるわけで、ともかく、これからの長い歴史をさ、共にがんばっていけるようなことでありたいと思う。

司会　皆さんの多くの貴重な意見を聞き、三里塚闘争がやはり、新たな飛躍に向けた大きな転換期にさしかかってきていることを、改めて痛感しました。

青行隊の皆さんをはじめとした反対同盟の皆さんの空港廃港へのそして又、現在、多くの農民が抱える様々な問題への模索と並々ならぬ意欲に、私たちも全力で応え切っていきたいと思います。

本日の座談会は、この転換期の中で、七〇年代を総括し、激動の八〇年代に向う闘いの布陣を築きあげていく上で、その核心である反対同盟の強固な団結と労働者の団結をしっかりと結びつけていく上で、大変意義深いものになるだろうと思います。

今後、闘いは尚長期にわたるでしょうが、団結を固め、勝利の日まで共に頑張りましょう。

今日は、どうもありがとうございました。

1,28狭山再審実現
中央大闘争に総決起せよ！

一九六三年五月二三日、部落差別に基づく権力犯罪の「生けにえ」にされた石川一雄氏は、獄中で十七年目の新年を迎えた。捜査―逮捕―裁判を貫く国家権力による差別―「獄死」攻撃との不屈の闘いは今日、日本の人民闘争の頂点に位置している。労働者は、この狭山闘争―部落解放運動を、階級的課題として取り組まねばならない。

石川さんの無実は明らかだ

七九年五月、石川氏の不屈の闘いと部落解放同盟―弁護団を中軸に、労働者、学生はじめ各界各層の広範な人民の共同した力は、国家権力（警察・検察・裁判所）が「石川＝犯人」の最大かつ唯一の根拠としてきた「自白」のデッチ上げを満天下に証明する新事実をつかみ取った。〝脅迫状〟の日付訂正箇所に関する新事実である。この新事実は狭山差別裁判の「確定」判決（高裁寺尾の「無期」判決）を根底から突き崩すものである。労働者階級は人民の先頭に立ってこの新事実＝批判の武器を使い切り、狭山闘争への決起＝武器の批判へ、部落大衆との共同した力へ転化し、石川氏奪還―完全無罪をかちとり、部落解放―労働者階級解放の一里塚を打ちたてる闘いに全力で取り組んでいかねばならない。そのためにすでに決起している先進的部分は、これまでの取り組みの不断の検証と同時に、新事実の持つ意味をしっかりつかみ、労働者大衆の前に暴露し、差別への怒りと無実の確信を広範に呼び起こし、部落大衆との共同した闘いの確固たる基礎を築くことがぜひとも問われている。

七四年十・三一、寺尾判決での「石川＝犯人」の根拠は次の通りである。①石川氏と犯行を結びつける「客観的証拠」（脅迫状の筆跡、佐野屋付近の足跡、スコップなど）がある。②捜査に不当な予断と偏見はなかった。③別件逮捕、再逮捕は合法・合憲である。④「自白」の強制・誘導はなく任意であり、一審中「自白」を維持しており信用でき、⑤「自白」によって発見された三物証（鞄・腕時計・万年筆）がある。⑥「自白」は真実であることが他の証拠により裏付けられる。さらに寺尾は、一審が「自白」を中心にすえ、これを補強する証拠が多数あるという論理構成であるのに対し、自分は「自白を離れて客観的に存在する物的証拠と被告人との結びつきの有無を検討し、石川有罪の結論に至った」とことさらに述べている。その客観的証拠の極めつけが筆跡と足跡であり、それに関する検察側鑑定の無批判的導入であった。この「自白を離れた客観的証拠」にこそ寺尾のペテンがある。客観的証拠は「自白」を前提（「脅迫状は自分が書いた」「五月一日には地下足袋をはいていた」という「自白」）として、かろうじて証拠とされたにすぎない。「離れた、離れた」と言いながら実は全面的に依存しているのだ。

この寺尾判決に対して新事実の持つ意味は何か？　それは寺尾のよって立つペテン＝「自白」の信用性を根本的に覆したことだ。これまでも筆跡、足跡、スコップ付着土壌、万年筆、死体等の物証に関する弁護側鑑定は、物証、「自白」のデッチあげを示して余りあるものであった。しかし寺尾は具体的に言及せず全て排除した。新事実はもはやこのようなペテンを絶対に許さない。

差別さらけ出した検察意見書

七九年十月九日、東京高検は再度意見書を提出した。これは五・二三以降の弁護側再審請求補充書意見書に対する反論である。内容は①脅迫状の訂正日付、②姦淫の態様、③死体の処理（その一）、④足跡、⑤万年筆、⑥死体の処理（その二）、⑦手拭、⑧結論、となっている。その結論とは、弁護団提出の証拠は「いずれも新規性、明白性がなく、確定判決の認定を覆すことは到底できない」とし、「本件再審請求においては、そのすべての主張、証拠を検討しても遂に再審開始の事由とはなりえないので事実の取調べを行なうまでもなく速やかに棄却すべきである」という前回同様、再審の「早期棄却」を主張する反動的代物であることに変わりはない。しかし訂正日付はじめ新事実の発見―「確定」判決の動揺という事態を前にして、文字通りのコジツケでつくろい、動揺が瓦解へと突き進み、人民の怒りが大爆発する前に「棄却しろ！」とワメく姿を見ることができる。

検察は、「確定」判決の動揺をつくろわんと必死になっている。意見書のこの部分を引用する。「確定判決に顕われた証拠によると脅迫の相手方が金員を持参すべき日として脅迫状に記載された当初の日付は四月二八日であり確定判決における認定もこれと同様であることは所論（再審請求）指摘の通りである」①しかし「仮に、所論指摘のように…当初記載されていたのが四月二九日であったとしてもそれが故に請求人が本件脅迫状を作成したものではなく、したがって請求人の自白調書に信用性がなく請求人は無罪であるということにはならない」②その理由は、「なぜならば、まず本件の犯人と請求人とを結びつける上で最も重要なことは…当初書かれた金員持参の日はいつかということではなく…（脅迫状と封筒の）文字が請求人の筆跡か否かということである」③とし、筆跡が一致することは検察側鑑定で証明されており、「確定判決及び上告棄却決定によって確定された動かし難い事実」であり、「自白を離れて請求人と犯人を結び付ける客観的証拠の一つとなっている」⑤としている。

以上の①から⑤の展開の仕方はまさに『白を黒と言いくるめる』ものであり、「確定判決」、上告棄却決定が「石川＝犯人」としたことに間違いはないことを言わんがためのものである。新事実はこの野望を許しはしない。とりわけ⑤の「自白を離れた客観的証拠」のデタラメさを暴き出す。検察側が持ち出す石川氏と脅迫状を結びつける根拠は、ただ筆跡のみであるがそれは部分でしかない（それすら権威とウソで塗り固められた鑑定を根拠にしているが）。しかし日付は、結びつき全ての破産を宣言している。石川氏は、日付について四回「自白」させられており、意見書のいう金員持参の日が二八日であることと同時に、脅迫状を書いた日は二八日だということであるのだ。意見書は後者の問題を握りつぶした。然り！　言及するや否や「自白」のデッチ上げを追認するハメになるからだ。そして筆跡の一致へと問題をすりかえる。それでも不安で、一挙に全てを隠ぺいすることに窮した検察は、遂に十七年前石川氏を「犯人」に仕立てあげ、以降ひたすら隠そうとしていた、あのやり方に戻らざるをえなくなった。「自白」（二八日）と客観的証拠（二九日）の食い違いは、石川氏の「記憶違い」（石川は嘘つき！）のためだと。これこそ十七年前の捜査開始から権力による犯罪として一審浦和地裁・内田による「死刑」判決に集大成されていったものである。すなわち、「育った環境が悪く、子守奉公にやられ小学校すら出ておらず、職業を転々と変えなければならなかった」、部落差別故にそれを強いられた石川氏の生い立ちを理由に「石川ならやりかねない、石川はウソつきだ！」と結論づけた検事論告、内田判決―部落差別を利用した権力犯罪である。寺尾の「一審とは違う」という嘘は、検察意見書によって再び狭山差別裁判の差別たるゆえんのもの、その本当の姿をさらけ出したのだ。

社会主義革命をめざし、労働者階級を部落解放の先進闘士へ押し上げよ！

先進的労働者、学生、農民は部落解放同盟を支持し、狭山差別裁判粉砕の闘いを担ってきた。その闘いは、部落解放同盟の提起する〝反差別共同闘争〟を労働者階級の側が主体的にとらえ返し、部落解放同盟の闘いと結合する労働運動を、どのように築きあげていくのか、またいけるのかを鋭く問うている。

だがしかし、近年、労働組合の取り組みが弱まり、中央共闘・地方共闘における形骸化が指摘されており、事実、労働組合での動員が減少してきている。これは今日の総評・民同―既成労組指導部が自らの労働運動指導の破産を右翼的「労戦統一」によって乗り切ろうとしていることと軌を一つにしている。彼ら既成指導部は、日本資本主義の好景気―高度成長の終焉以降、「国民春闘」なる衣替えによってその手直しを行い、「弱者救済」等を強調してきた。しかし彼ら改良主義の真の姿が、構造的不況下での賃金抑制・合理化攻撃の前に無力性をさらけ出し、その決定的破産が支配階級の手で宣告されるや、白旗を掲げ「ブルジョア国家権力との和解（連合政権）」「資本家との和解（経営参加）」を声高に叫び、労働者の運命をそれに依存させようとしている。その「和解」は現実には大量合理化、配転の受け入れ、暴力的職場支配への屈服である。さらにそれに反抗する先進的労働者の排除、レッドパージの進行であり、戦闘的争議団への弾圧である。それを可能にさせているものこそ、労働者間の競争と対立、労働者と被差別大衆との分断、対立という差別・分断支配に他ならない。この点を解放同盟は「資本家が右足で部落民を踏みつけているとき、左足では労働者を踏みつけている」と指摘して反差別・反権力の立場から、広範な被差別大衆、労働者大衆との団結をめざし〝反差別人民共同闘争〟を提起している。

労働者階級は、この部落解放同盟の提起に応え、自らの課題として部落解放を大胆に掲げ、部落差別が資本主義とブルジョア階級独裁によって打ち固められていることを解放同盟との共同した闘いをもって打ち破っていかなければならない。そのためには、労働組合の戦闘的階級的再生の闘いを推し進め、職場からの部落解放の闘いを強め、反差別共同闘争へ労働組合を取り組ませると共に、それに敵対する労働貴族―新旧修正主義幹部を追放し、彼らにとってかわることであり、まさにそうした闘いを通して、真に労働者階級を被抑圧階級・層、被差別大衆の指導階級へと高め、打ち鍛えていくことができるのである。

その重要な試金石が狭山闘争を軸とする部落解放運動との結合であり、再審実現をめぐって、十二・二五弁護団意見書提出と、それ以降の正念場としての現在の闘いであるといえよう。

狭山闘争、なかんづく一・二八闘争が、こうした位置と性格をもっていることを広く労働者、農民、学生大衆の前に宣伝し、差別・無実・権力犯罪を暴露し、労働組合に部落青年は先頭に立つと決意をうけた。そして合同教西口氏より石川氏との面会報告、差別糾弾とは何かを中心に講演が行われ、最後に都連鈴木副委員長より集会宣言が提起され閉会した。

集会宣言

「東京では混住が進んでいるから部落差別はなくなりつつある。」―東京都民の多くがこうした意識を持たされている。

しかし、本日の集会で明らかにされたように、「今戸差別事件」「荒川工業高校差別事件」「本木差別落書事件」といった地域での差別事件をはじめとして、大学での差別落書事件、差別出版物の発行と、この二～三年だけをとっても生命にかかわりかねない悪質な差別事件が続発している。

こうした差別事件は、東京都民の中に社会意識としての差別観念が存在することをはっきりと示しており、東京都のおざなりな「同和」行政、部落民を排除しようとする企業の差別体質が、部落差別を許し、拡大させていることを教えている。

一方で、ぬけ道のない不況とインフレが部落大衆の仕事と生活を奪おうとしており、こうした差別事件の続発はまさに部落民に死を強制するものであるといわねばならない。

去る10月9日、狭山差別裁判の検察意見書が提出されたが、その内容は石川無実の新証拠をふみにじり、あくまで再審棄却を行なおうとする差別的なものであり、東京高裁は来年一月にも再審棄却を行なおうとしている。狭山差別裁判は、司法の項点から部落差別を固定化しようとするものであり、一切の部落差別が集約されたものであるといわねばならない。それ故我々は、差別糾弾闘争の最も重要な闘いとして、部落民の運命をかけた闘いとして狭山再審闘争に勝利しなければならない。

差別者集団「日本共産党」は、今日では部落差別をなくすどころか「国民融合論」と差別キャンペーンによって政府―支配階級の部落差別拡大に手をかし、差別者を擁護するなど差別者集団としての本質をむき出しにしてきており、断固として糾弾していかねばならない。

我々は、こうした厳しい部落差別の現実を全都民に訴えると共に、労働者をはじめ全ての差別と闘う仲間との連帯、共同闘争を押し進め、部落差別をはじめ一切の差別をなくすため闘うものである。

右、宣言する。

一九七九年十二月六日

「12・6あいつぐ差別事件を許すな！真相報告集会」

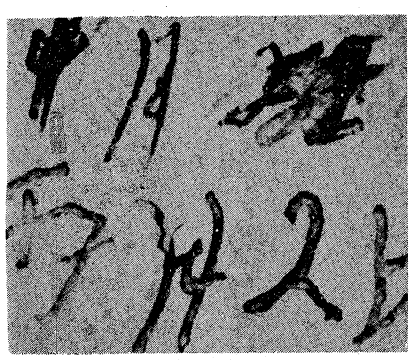
あいつぐ差別事件を許すな！

12.6都連報告集会に1200余が結集

「差別事件の真相と差別を生み出した社会的背景を全東京都民に訴えると共に、部落差別をなくすために共に闘うことを訴えていかねばならない。」を基調に、東京九段会館に一二〇〇余名の部落大衆、労働者、学生が結集し〝真相報告集会〟が東京都連主催で開催された。集会は部落解放東京共闘、都同教、企業連等のあいさつで始まり、都連藤沢書記長より基調報告が行われた。基調は最近のあいつぐ差別事件が都の「同和」行政、「同和」教育が部落差別を生み出す根源に至ることなく、事後処理的で表面をつくろうものでしかないこと、そのことが差別者、企業、都行政、教育当局者への糾弾の過程で明らかになっていることが報告された。さらに差別を生み出す社会的背景には長びく不況とインフレ、大量合理化、生活破壊にみまわれた労働者の反抗によっての階級支配の大きな動揺があり、だからこそ、部落差別がよりはっきりした形で現われ強められていること（『部落地名総鑑』を見よ）それは同時に労働者への差別・分断支配の強化であり、右翼的再編のテコとされていること。政治的には部落差別の元凶たる天皇の下への国民統合が、元号法、靖国神社法、君が代の国歌化などによって進められており、天皇の賛美は部落差別強化に直結するものであり、総じて政治支配のファッショ化が進行していること。そしてそれらによって勇気づけられた日共は「『国民融合』が進んでいる今日部落差別はあってはならないものであり全ては解同のデッチあげである」と差別キャンペーンを行い、差別をあおり、敵対を強めていることが明らかにされた。最後に今後の闘いの方向として、①部落民の自覚と決起を促し大衆的な糾弾闘争を進める、②地域の労働組合に差別事件の真相を訴え、共同闘争の発展をかちとる、③東京都の「同和」行政＝差別・融和行政を糾弾し解放行政を行わせる、④『地名総鑑』に見られるような企業による就職差別を許さず点検・糾弾を進めることが明らかにされた。続いて台東支部（今戸差別事件）、荒川支部（西日暮里　差別落書）、墨田支部（京成電鉄差別落書）、足立支部（本木差別落書）、から報告と糾弾闘争への決意を受け、関東部落青年友の会からは早大、都立大、明学大などでの教官による差別発言、差別落書糾弾闘争と狭山闘争

12・25弁護団意見書提出

昨年十二月二五日、弁護団意見書が提出された。この日、東京都連を先頭に部落大衆、労働者、学生三百余人が日比谷小公園に結集し決起集会を開催した。この間、東京高裁への要請闘争、坐り込み闘争が都連を中心に、連続闘争として闘われてきている。弁護団と連動した高裁糾弾闘争に恐怖する権力は、この日も付近一帯を戒厳令下においた。前述したように検察の「速やかに棄却せよ」なる意見書を受けた高裁四谷は、事実調べすら行なわず、再審棄却を目論んでいる。部落大衆の闘いに合流し、何としても再審をかちとるべく一・二八闘争に大結集を！



63年6月1日付埼玉県警本部鑑識課の関根・吉田による鑑定書

上欄余白の、「少時様」の文字、第二行目の「4」状、「28」状、第三行目の「前」等の文字が乱雑に抹消されている。